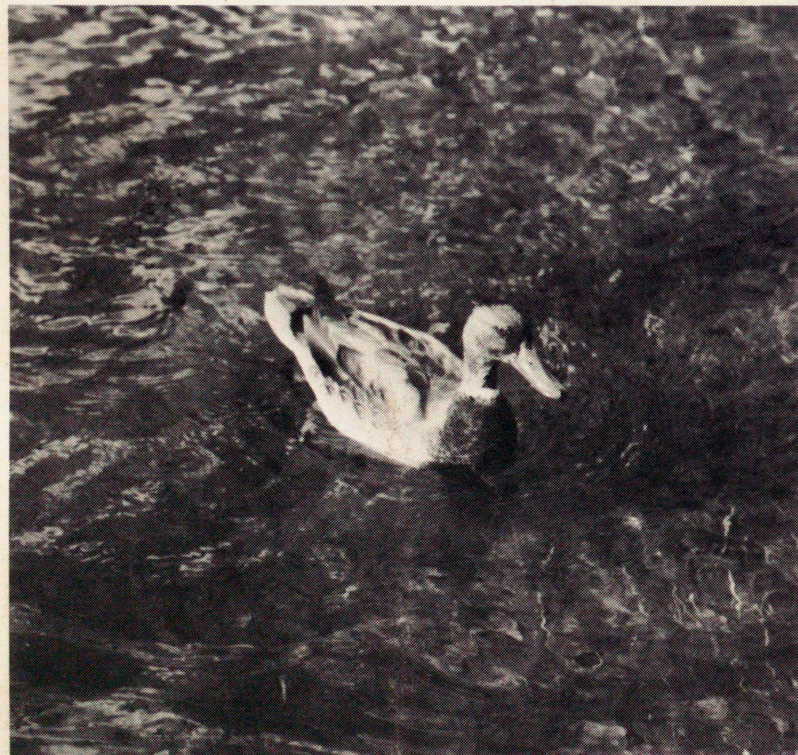


# ふじみの



No. 28

東京農大畜友会

## 卷頭言

畜産学科長 渡 邊 誠 喜

“ふじみの”第二十八号の発刊に際し、一言御挨拶を申し述べる。

早いもので、平成元年の卒業生約一六〇名を世に送るときが来た。顧みればこの一年間は種々の特記されるべき事項があった。身近に畜産界関係のみを拾ってみても、牛肉の輸入自由化への締結、第十八回万国家禽学会議の名古屋市での開催、牛の体外受精胚の出産、等々。明るいニュースと共に、今後吾等畜産人にとって試練ともなることを暗示する様な事柄も多い。

この様な時に学窓を巣立つ諸君は“幸せ者”であろう。何時の世も、中心となつてそれを動かす者は諸君の様に実践的技術とそれを裏打ちする学術とを身につけた中賢層である。畜産学徒にとって難しい時こそ、卒業される諸君の活躍の場

は拡大するものと信じ、努力して貰い度い。

当畜産学科が創設されて丁度四十周年に当る。これを記念して学科同窓相集い「同窓会」を結成した。諸君も同窓生の一員に加わる訳である。全国、否世界各地にて活躍している同窓生の更なる団結と緊密なる連繫の下、世界の人間社会から飢餓さるものが無くなるべく儘力して欲しいものである。

健康に留意され、時には帰巢本能を発揮、母校を訪ねられん事を祈りつゝ、筆をおく。

平成元年二月二十日記

### ふじみの発刊にあたり

畜産学科三年 神 永 憲 一

昭和の時代から平成の時代へと新しい時代がおとずれた今年で「ふじみの」も二十八号を発刊することになりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を主に記載され、また昨年一年間の事業報告、決算報告などを記載されております。一つ一つが良くできた文とは言えませんが心がこもった文章となっていますので最初から最後まで、みなさんが読んで下さる事を希望いたします。

ふじみの  
目次

第28号

巻頭言

ふじみのの発刊にあたり

神永 憲一 3

集う学友

家畜人工授精師実習記

四年 松本美枝子 15

御一報

家畜繁殖技術の最先端

教授 石島 芳郎 6

私の自転車概論

三年 小野 裕也 16

ルミノロジー  
ことはじめ

嘱託教授 津田 恒之 10

スポーツ大会

二年 バレボル 19

私の体験から

一年 吉田 春昭 21

収穫祭を終えて

一年 広田 武司 23

In the distance

四年 サンバ浅水 24

同窓会だより

畜友学科同窓会より  
ごあいさつ

会長 伊藤 澄磨 14

Summer Course Bluese

三年 Mrみたんかえ 26

研究室だより

家畜飼養学研究室

27

家畜育種学研究室

28

家畜生理学研究室

31

畜産経営学研究室

32

家畜繁殖学研究室

34

畜産物利用学研究室

37

家畜衛生学研究室

39

収穫祭だより

収穫祭が終った今

三年 神永 憲一 42

宣伝隊としての役目を終えて

三年 近藤 満之 43

前夜祭・特別企画  
委員長を終えて

三年 永田 憲明 45

家畜苑を終えて

三年 宮内 伸夫 46

北門装飾を終えて

三年 畑 肇 48

結果報告

52

第96回収穫祭畜産学科統一本部決算報告

53

畜友会だより

昭和63年度臨時総会報告

54

平成元年度定期総会報告

54

昭和63年度畜友会役員名

54

昭和63年度畜友会決算報告

56

昭和63年度畜友会事業報告

57

学内スポーツ大会結果報告

58

平成元年度畜友会行事計画

59

畜友会規約

60

編集後記

63

## 家畜繁殖技術の最先端

教授 石島 芳郎

ひと昔前の家畜の繁殖技術の最先端といえば、受精卵（胚）移植ならびにこれに関連した胚凍結、体外受精などが話題の中心であったが、一九八〇年初頭に「分離胚一卵性双子ヒツジ」、「クローンマウス」、「処女生殖マウス」、「スーパーマウス」などあいついで新技術が登場し、ついに家畜繁殖の分野でも、胚の分離・切断による一卵性双子作出技術の実用化をかわきりに、キメラ動物、多倍体動物、クローン動物、外来性遺伝子導入動物などの作出のための顕微的胚操作技術の開発時代へと突入した。

ここでは、こうした最先端技術の動向を紹介しよう。

## 一、一卵性双子の作出

家畜の一卵性双子の発生頻度は、単胎家畜で多くみついても〇・一％くらいなので、自然界でこの双子を得て利用することはほとんど不可能に近い。もし人為的に胚を分離・切断して容易に一卵性双子が作出できれば、受精卵移植において貴重な胚が有効に利用できるうえ、

得られた双子を種々の研究に供試することで、信頼性の高い結果を少ない例数で得ることができるとの利点がある。したがって、この手法は単胎家畜ではきわめて有用である。

この技術のさきがけは、一九七九年にイギリスのウイラドセンによってなされた。氏は卵管から採取したヒツジの二細胞胚を、微細なガラス針で切断し、得られた分離胚を寒天に封入していったんヒツジの卵管で体内培養してから、それを取り出して本移植するという方法で五組の一卵性双子の作出に成功した。この方法は、その後、二細胞（桑実期胚）を分離・切断した場合の方法として用いられ、ヒツジばかりか、ヤギ、ウシおよびウマの一卵性双子の生産にも成功している。

一方、この方法は一時的にせよ生体内培養が必要で手間がかかるため、これをはぶくために発育の進んだ後期桑実期胚や胚盤胞を、微細なガラス針あるいは鋭利な刃で二つに切断した後すぐ移植する方法も開発され、これによっても、ヒツジ、ヤギ、ウシなどの一卵性双子が作出されている。

現在わが国では、後者の方法が主にウシに応用されている。前者の方法も再現性のある方法であるが、普及させるには体内培養でなく体外培養の技術開発が必要である。

## 二、一卵性三つ子、四つ子の作出

胚の分離数をふやして一卵性三つ子や四つ子が容易に

作出できれば、一卵性双子以上に有用性が高まることになる。しかし、単純な胚の分離・切断法での双子以上の多子作出はなかなか困難で、まだウイラドセンらが一九八一年に、四〜八細胞胚を微細なガラス針で切断四分分離した後、いったん卵管で培養し、さらに本移植する方法で、ヒツジに三組の三つ子と一組の四つ子、ウシに一組の三つ子を生ませた以外成功例がない。

理論的には四細胞胚を四分離、八細胞胚を八分離し、それぞれの割球を培養して胚盤胞まで発育させて移植すれば、四つ子や八つ子ができる理屈になるが、現実には四つ子を作ることさえなかなか難しいのである。この原因は、四分離した割球が胚盤胞を形成する際に、正常胚の四分の一の細胞数しかもてないことになり、結局は内細胞塊（胚結節になる部分）を形成する細胞数が少なすぎるためとみられている。

このように、単純な分離胚による多子作出に限界があるため、分離した割球それぞれを別の割球あるいは未受精卵と結合させる方法も検討されている。

くだんのウイラドセンは、A系統のヒツジから採取した胚から分離した八分の一胚と、B系統のヒツジから採取した胚から分離した四分の一胚とを融合させる方法やヒツジの八または一六細胞胚の八分の一胚を、核の部分の細胞質を除去した未受精に融合させる方法で一卵性多子作出を試み、前者の方法で一組の五つ子の作出に成功し、後者では多子は得られなかったが融合胚から子を

得ることに成功している。後者の成功は、未受精卵に分離割球の核が移植されたことになり、論文の題名も「ヒツジ胚の核移植」となっている。この研究は家畜胚の核移植研究のさきがけともなった。

このような分離割球を未受精卵に融合させたり、割球の核を核抜き受精卵に移植する一卵性多子作出技術は、現在マウスでかなりの成果をあげている。

## 三、キメラ動物の作出

キメラは、ギリシャ神話に登場する頭がライオン、身体がヒツジ、尾が龍という怪物を語源としており、二以上の異なった遺伝子を持つ複合体（動物）のことをいう。ふつう人工的に二個体あるいはそれ以上の個体の受精卵（胚）を集合させて作出する。

こうしたキメラは、家畜では、すでにヒツジ同士、ウシ同士、さらにヒツジとヤギで成功している。

これに用いられた方法は、細胞集合法と細胞注入法のいずれかに分けられる。前者では、別々の個体から採取した四または八細胞胚の透明帯除去胚同士または分離割球同士を接着し、体外（体内）で培養して胚盤胞まで発育させて移植する方法が、後者では、胚盤胞の内細胞塊の割球を分離して、その割球の一部または一つをマイクロピペットに吸い、別個体の胚盤胞の中に注入してキメラ胚を作り移植する方法がとられている。

現在までにキメラ個体作出に成功した報告は、ヒツジ同士が五編、ウシ同士が二編、ヒツジとヤギが二編である。

このキメラ作出で注目されたのは一九八四年のフェイリーらおよび一九八七年のボルジンらのヒツジとヤギのキメラである。この個体は、半分はヒツジで半分はヤギという代物なので、まさに複合個体のさいたるものである。ヒツジとヤギは動物分類学上、属を異にしているもので、異種間でありしかも異属間のキメラということになる。

キメラ個体の作出は、以上のほか二細胞期胚の片側の割球の核の交換移植でもマウスに成功している。家畜ではまだこの方法での成功例はみられない。

ところで、家畜のキメラ作出にどんな意義があるのであろうか。結論からいうと、得られたキメラを対象に遺伝型の異なる二種以上の細胞の相互作用や形質発現の制御などの解析に役立つなど研究面の意義は大きい。応用面では今のところゼロといってよい。毛皮生産動物に應用すれば、交雑では得られない変わった毛色（毛皮キメラ）が得られるので役立つかも知れないという主張もあるが、どう利用されるかはまだまだ先の話であらう。

#### 四、クローン動物の作出

家畜の最先端技術として今最も期待されているのが、核移植によるクローン動物の作出である。クローン動物とは、遺伝的に全く同じ個体から有性生殖なしに作り出された個体ということで、簡単にいえば同一個体の分身（コピー）のことである。ふつう利用しようとする量的形質を継代したいときは、交配して子を生ませていくが、環

境の影響を受けやすい量的形質はかならずしもその子に発現するとはかぎらず、固定にも時間を必要とする。簡単にクローン個体を作ることができれば、そんな手間をかけずに即座に再現できることになる。

これを作る原理はいたって簡単で、ようは成体の細胞の核を何らかの方法で発生させて、その成体と同じ個体を作ればよい訳である。しかし、この手法はじつに難問で、脊椎動物ではアフリカツメガエルでごく限られた細胞の核の移植でしか成功していない。哺乳動物の場合には、発生初期の胚の核を核抜きした受精卵に移植して子を作るのが現在やつとのところにある。

そのさきがけは、一九八一年にイルメンゼとホッペがマウスの胚盤胞の内細胞塊から得た核を、除核した受精卵に移植して発生させ、それを仮腹に移植して子にしたというトピック的報告がもたらされたが、実はこの報告は後の追試で再現性がないことから葬りさられた。この報告が契機となり、胚の核移植は多くの研究者によりマウスで検討され、現在、マウス八細胞期胚の核を移植して子供が得られる段階までは研究が進んでいる。

こんな訳で、同一個体からコピーするというクローン動物の作出は、まだ遠い夢といって差し支えない。

#### 五、トランスジェニック動物の作出

核移植とともに先端技術として期待されているのが、トランスジェニック動物（遺伝子導入動物）の作出技術である。

これは、単離した特定の遺伝子を受精卵の前核に注入して、その細胞のなかで導入遺伝子を発現せよとするとするもので、うまく導入した遺伝子が組み込まれて生まれた動物をトランスジェニック動物という。もし外来性遺伝子を容易に導入できれば、長い年月をかけて成し遂げていた家畜改良が、それこそたった一代で達成できることになる。

しかし、現実はその簡単なものではなく、研究の進んでいるマウス以外はほとんどみるべき成果があがっていない。

すでに触れた「スーパーマウス」はこのさいたるものである。一九八二年にバルミッターらは、マウスマタルチオネン（カドミウムや亜鉛と結合するタンパク）遺伝子のプロモーター部分（これは肝臓で強く働く）にラットの成長ホルモン遺伝子をつないだ合成遺伝子を導入したマウスを作り、それに重金属を飲水投与したところ肝臓で多量の成長ホルモンが生産され、マウスの体重が通常の二倍にも達したというのである。これはすぐにウサギ、ヒツジ、ブタなどでもためされたが、合成遺伝子の導入率が低く、成長ホルモンの生産もみられず失敗に終わっている。家畜においても、マウスのように遺伝子導入が容易であれば応用面は広いが、現状では技術そのものがこれからの課題である。

#### 六、その他の話題

研究そのものは新しいものではないが、発想がユニ

クなのが屠場から採集した卵巣から回収した卵胞卵の体外成熟・受精・移植のシステムによる子畜生産技術である。これは、肉牛資源の有効利用の立場から、ウシについては完全に技術体系が確立し、和牛の子牛生産に應用されている。最近、ブタ卵巣の利用についても検討が始まっているが、ブタでは屠場卵巣由来卵子からの子はまだ得られていない。

このほか、二分離胚の一方を性別別して、他方を移植することにより望む性の子を得ようという技術もかなりの進展をみせている。さらにこの一方の胚を長期凍結保存しようとする研究も進んでいる。

またすでに確立している受精卵移植技術を活用して異種胚の移植の研究もはじまっている。最近、ウマ（ポニー）にシマウマの胚を移植してシマウマの子を生産した例が話題になった。この成功は、稀少野生動物の増殖法としても注目されている。

以上、駆け足で最先端の家畜の繁殖技術を紹介した。最近バイオテクノロジーから、とかくこうした最先端技術が話題になるが、述べてきたように現在完成している技術はごくわずかにすぎず、それ以外は今後の課題である。胚を操作する各種の研究は、最低体外培養と移植技術がつきものであるが、家畜胚の体外培養技術はまだ十分に確立していないので、先端技術の完成にはまず培養法の確立こそ先決であらう。

## ルミノロジーことはじめ

嘱託教授 津 田 恒 之

### ルミノロジー

ルミノロジーという言葉が聞かれたことがあるだろうか。この言葉は一九五七年に、アメリカ・メリーランド大学にJ.C.Shawとていう教授がいて「Contributions to Rum Inology」という小冊子を発行した。この場合はルミノロジーという語はかなり広い意味に用いられていて、内容をみると、彼自身は反芻動物（ルミナント）の飼養全般に関連する生理学を考えていたようである。

丁度その頃、私は仙台の東北大学に在職していて、梅津元昌教授（元日本獣医畜産大学長）の下で反芻動物の消化生理の研究を行っていた。東北大学農学部畜産学科の創設も、本学旧専門部畜産学科の誕生と同じく昭和二二年で、当時は第二次大戦終了後、間もない頃であったので、誰もが今後の日本がどうなるのか、何を研究目標としたらよいか、暗中模索の時代であった。それでも、戦争が終り、平和の時代となって、軍馬を中心とした畜産は終りを告げたことは誰もが感じていた。

全国各地に創設された畜産学科の各研究者は、畜産の発展には明るい光明が見えてはいるものの、自分の研究方向には頭を悩ませていた。東北大学のある東北地方は

広大な草地資源をかかえていたので、牛を中心とする反芻動物の研究を一つの柱にしようということは比較的簡単に決まったが、さて生理学の中で何を専門に研究するかで迷った。運動生理？繁殖生理？神経生理？などなど。反芻動物の消化が、どのようなメカニズムで行われるのか、初歩的なことがいくらかわかり始めた頃、ルミノロジーという言葉があるのを知った。機を見るに敏な梅津教授は早速、この言葉に飛びつかれて、しばしば口にされるようになった。何かの現象をカタカナを使って言いかえると、新鮮味が増して人の気を引くことができるのは今でも同じかもしれない。梅津教授はルミノロジーの定義を「第一胃の機能を中心とし、よって派生する消化・代謝・栄養の生理学」とされ、大いに宣伝された。その結果、ルミノロジーは脚光を浴び、研究費も出るようになり、多くの人の知るところとなった。しかし、残念ながらアメリカ始め諸外国では現在、この言葉はあまり使われていないようである。

### なりたち

梅津教授は東大の家畜生理学教室を卒業されてから、満州（今の中国東北部）にわたられ、奉天（今の瀋陽）にある南満州鉄道株式会社の獣疫研究所というところに勤務された。当時の満州では、なお人畜共通伝染病が猛威を振っており、鼻疽（主に馬がかかり、十日前後で死亡する）もその一つであった。梅津教授はこの疾病の診

断、治療にとり組まれ、動物（宿主）と微生物の相互関係に深い関心を持たれるようになった。この場合は鼻疽菌が動物に感染して、害を与え最後には殺してしまう寄生関係である。ところがこれとは全く逆に動物と微生物が互に利益を与えあう共生関係もある。そのよい例が反芻動物のルーメン（ルーメンには第一胃という立派な日本語があるのだが、ルーメンと云ったほうが響きもよいし、云いやすいのでよく使われる）にあることに気付かれた。反芻動物はルーメンの中にいる微生物のために餌を食べる。微生物は自分が生きるために餌を利用するが、終末産物（揮発性脂肪酸）や自分自身を動物に与える。動物はそれらを利用して生きてゆく。いささか云い方がオーバーかもしれないが、このような相互共生関係は微生物と反芻動物、広くいって草食動物全般にみられる。反芻動物ではルーメンが膨大で、消化管上部に位置しており、健康も疾病もすべてここから始まるとして、梅津教授は最初の頃、ルミノロジーをルーメンロジーと発音しよう（畜産の研究・十二巻・一九五八）と考えられたこともあった。

共生関係にはアリとアリマキ、荳科植物と根瘤菌などが一般的な例としてよく知られている。微生物は、多くの動物の腸管内に生息していて、ヒトの場合も食物繊維の五十％は結腸内細菌で消化されるという。最近知ったことであるが、進化学によると、核を持たない細菌のような原核細胞が三十億年ほど前に生じ、それから長い年

月をかけて、我々のからだを作る核のある真核細胞に分化してきたのだそうである。ただし、段々に進化したのではなく、ある一部の原核細胞が、核を作って真核細胞となり、その細胞内に別の原核細胞が住みつき、最初は別々に生活していたが、次第に共生関係を営むようになり遂には宿主の一部として組み込まれ、現在に至っているという。ミトコンドリア、植物にみられる葉緑体、娘細胞を作るときに必要な収縮系などは、皆、真核細胞内に住みついた原核細胞に由来するという。我々の細胞自身は二つの生物（細胞）の共生の成果であるという話には驚くほかほかはない。共生が生物同士がお互いに生きてゆく為の重要な手段であることを改めて思い知らされた気がする。

### はじめの頃

我々がルミノロジーの研究を始めた頃は、反芻動物の消化に関する知識は誰も持ち合せていなかった。ようやく輸入され始めた外国の文献などを読みながら、追試的な手探り実験からとりかかった。山羊は紙を食うが、本当にルーメンの中で消化するだろうか、口からカテーターを入れ、ルーメン液を採取して培養し、その中に濾紙を入れて、毎日濾紙の減り方を計ったりした。ルーメン液を一度に大量にとりたかったので、山羊に餌を腹一杯たべさせてからカテーターを入れてみたが、かえって採取できなかつた。食べた餌に邪魔されてとれないのである。むしろ、少し絶食させてからのほうがよく取れるこ

とがわかった。

ルーメンにフィステル（瘻管）を手術で作ることも覚えた。牛に直径三十種もある大きなフィステルを作ることも出来るようになった。こうすると、フィステルから手を入れてルーメン内容を全部とり出すことができ、サンプル量にこと欠くようなことはなくなった。内容をとり出したあとを除くと、ルーメン壁が活発に運動している状態がよくわかり、それを映画にとってもらったりした。

この牛を農学祭（本学の収穫祭と同じもの）に展示して好評を博した。ある子供連れの奥さんが来て、子供の頭をスッポリとルーメンの中に入れて観察させていた。この子供さんは牛の不思議さに触れてルミノロジストになったのだろうか……。このような手術した動物の展示は、今だったら、動物愛護上、問題があるとして許されないかもしれない。

普通、我々の胃からは栄養素の吸収はしないが、ルーメンからは吸収されるということで「小ルーメン法」という手術法を考案して実験を重ねた。何時間か、かかる実験の途中で、昼飯などを食べに出かけて、山羊を保定台に一匹にすると、必ずアバれ、実験をフイにすることがよくあった。やっと、山羊も淋しがりやで一匹にすると暴れるので、他の仲間か、あるいは人がいなければ駄目だということに気がついた。人でも動物でも一人では生きていきにくいのである。あれや、これや、試行錯誤

達したといってもよいであろう。

しかし、まだまだ研究すべきことは多い。反芻動物についての感覚生理学（味覚、嗅覚、聴覚、視覚など）は世界的にも未発達といってよい。どんな餌を彼等が好むかという点だけをとってみても、ただ飼育上の問題に止まらず、動物の側にとっても、重要な問題であると思う。

おわりに

ルミノロジイという言葉のいわれ、その生い立ちについて、昔を振り返ってみた。今、日本のルミノロジイが世界と肩を比べ得るレベルにあるとあって、すべての点についてではない。学問としての厚みの薄さのみならず、畜産業としての規模の小ささからも、まだまだ外国に学ぶところも多い。

しかし、この学問の始まった四十年前と今とでは、世界における日本の立場そのものが変ってきた。国際交流も盛んになり、日本のルミノロジイも自国だけのものではすまなくなってきた。得られた知識は世界の何処とでも交換し、大いに活用されなくてはならない。

私が本学にお世話になってから、まだ二年にしかならないが、お会いした学生諸君は皆、真面目で素直な青年ばかりであった。卒業され、畜産の現場に就職されようと、他の分野で活躍されようと、諸君の見識と努力が日本の、また世界の新しい畜産を支えてゆくに違いないと信じている。

している中に、四十年が経過してしまった。

これから

反芻動物は今から五百万年ほど前に地球上に姿を現し、人間に飼われ始めてから五千年以上にもなる。始めは狩猟の対象となり、次には遊牧の民の友として、更には農業の宝として人間と共に生きつづけ、現在、家畜として三十億頭以上があり、なお、増加の傾向にある。その高い環境耐性から、世界中のほとんどいたる所に生息しており、貴重な蛋白質資源となり、あるいは様々な生活物資を供給している。性質は温順であり、なによりも飼料が人間の食糧と競合しないところが最大の利点である。

日本では現在、畜産の危機が叫ばれているが、日本人の高いレベルの知恵がこれを克服し、新しい方向を生み出してゆくであろう。

今もルミノロジイの研究成果に基づいて次々と新しい技術が生み出されている。ルーメン発酵の人為操作、ルーメンバイパス蛋白質、ホルモン（成長ホルモン、メラトニンなど）による生産性向上、遺伝子操作によるルーメン微生物への新性質の付与などなどである。ここにそれぞれの技術について書くことはできないが、これらについて最新の研究成果の発表が「国際反芻動物生理学シンポジウム」として本年八月末に仙台市で行われる。世界の学者にまじって、日本人研究者の発表も多い。その意味では歴史の浅い日本の畜産学の一分野であるルミノロジイもようやく世界と肩をならべ得る段階に



## 同窓会だより

### 畜産学科同窓会よりごあいさつ

会長 伊藤 澄 磨

昭和六十三年の秋、我々の学科同窓会が発足致しました。我が母校東京農業大学は再来年創立百周年を迎えようとして居ります。又、畜産学科は本年設立四十周年記念の年に当たります。

畜産学科は、昭和二十四年に創立され、昭和三十六年迄千葉県茂原市にキャンパスがあり、後に世田谷に移転をし現在に至っております。

この間卒業生約四千有余人は日本国内外に於て御活躍中であります。その卒業生が総力を挙げ大学の発展と同窓各位の連帯と社会活動の充実に目指し畜産学科同窓会が設立されました。設立に当り特に学科の先生方の御身の御努力に厚く御礼申し上げるものであります。

この学科で学んだことを宿世の縁として又生涯の絆としていただければ幸甚と存じます。在学生の皆様は卒業の暁には会員としてこの会の益々の発展に御力添えを願うものであります。

学生生活の一日一日が素晴らしい日であることを御祈りしてごあいさつと致します。

## 集う学友

### 家畜人工授精師実習記

家畜衛生学研究室四年 松本 美枝子

私にとって、家畜人工授精実習は、大きなハブニングから始まりました。実習開始の八月十八日、私は学校での集合に本当にあと一歩というところで遅刻してしまいました。途方にくれている私を、繁研のA君が「急げば間に合う。」と行ってバイクをとばしてバスを追っかけてくれました。あの時のA君の素早い対応には驚きました。それから今だから言えますが、実習用の荷物を持った私を後ろに乗せて、裏道をよくもまあ、あのスピードとばしてくれました。私はA君の背中で実習には行きたいけど死にたくないとの心の中でつぶやいていましたがしかし、A君の好意もむなし、私達は東名の入口まで行って、バスに追いつくことができました。次にA君は、彼の後輩のK君に頼んでくれ、車で富士まで追っかける手はずをととのえてくれました。そして私は



再び学校にもどり、K君の車でA君とK君と三人で富士農場へ急いだわけです。農場ではもう昼食が済み、荷物を整理しているところに間に合いました。先生にお詫びをして、昼食をいただきました。忘れもしません。メニューは中華丼でした。食べた後、二人は学校へ帰っていききました。本当にお騒がせしてしまいました。又この場をかりてA君とK君にお礼をしたと思います。本当にありがとうございました。

というところで、私の実習はいきなり事件で始まってしまいました。ところで実習内容ですが、時間的に余裕があったせいか、みんな積極的にすすんでやったせいか、とても楽しくできました。勉強はしました。試験が小刻みにあったこともありすが、資格を持つ者として恥かしくないようにと、勉強は、皆一生懸命していました。三年生の必修で繁殖や生理の授業がありますが、実習ではそれらの知識を現実に利用します。つまりホルモンだとか、卵子だといったようなことの机やノートの上だけのもの、頭の中でぼんやりと理解していたものが、はっきりと目の前に現われてきます。授業の時からしっかり理解していた人もあると思いますが、私は三年生の授業内容をこの実習で理解しました。四年も半ばをすぎで、やっと畜産学科の学生になった気がしました。又、先生方の御指導は細部に渡ってあり、私達の基本的な質問に

も丁寧に答えて下さってとてもよく解りました。ありがとうございました。実習も直腸検査等、一〇三年で体験的に行ったことを納得するまでできました。これは検査を行った農場の牛にお礼を言わなくてはいけないと思います。とにかく、資格の欲しい人はともかく、畜産人として勉強した人は、(数の制限がありますが)参加することをすすめます。やる気を持って参加すれば得るものが大きいこと間違いなしです。四年生のけっこう忙しい時期ではありましたが、私はこの実習でとてもいい経験と、いい勉強と、時間には遅れるな、という教訓を得ることができました。

追伸

こんなにためになった実習中学んだことを、三月にむけてもう一度勉強する機会を与えて下さった門司先生、ありがとうございました。

## 私の自転車概論

家畜繁殖学研究室三年 小野裕也

さて、自転車とは何ぞや。私も自転車の定義は知らなかったのだが、国語辞典曰く、「乗った人が、足でペダルを踏んで車輪を回しながら走る仕掛けの二輪車」だそうである。因みに直ぐ後には「操業」というのがくっついていて、私の欲目で自転車を定義すると、「乗る人の力を増幅して走行する現在最も単純かつ美しい乗り物」となる。辞典のそれではあまりにも色気がない。自転車が気の毒である。

自転車の構成は、基本となるフレームと車輪、ハンドル、ペダルギヤ等のトランスミッション、ブレーキ、サドル、その他より成る。フレームは、主にクロムモリブデン鋼等のものが主、最近ではアルミ、炭素繊維、チタンを使用するものもある。車輪はリム、スポーク、ハブ、タイヤ等からなり、ステンレスが多用される。タイヤは多くは、ワイヤードオンとよばれる形式、チューブ内の空気圧で、リムにはまっっている。スポーツ車のチューブラータイヤは、接着剤でリムにはりつけてあるものだ。

ハンドルはオーソドックスなノースロード型(新聞屋さんのそれ)からDH型(ダウンヒル型)、トライアスロンでよく見る)まで数多くある。材質は、アルミや軽合金が多い。トランスミッションは、ペダル、クランク、ギア、チェーン等から成る。ベルトドライブのものも増えてきた。車両規定では二十四段変速以上は認められない。ブレーキ。自転車にもっと金をかけていい部分の一つ、ドラム、ディスク、キャリパー、コースター等の形式があるが、軽量かつ信頼性の面でキャリパーがすぐれている。以上、ざっとこんなところだ。

最近、自転車流行のようである。至るところで極彩のウェアを着こんだ人を見るようになった、高価な自転車が街を走る。フィットネス等々で、健康にいいからといって自転車に乗る人もいるようだ。とてもいいことだと思う。願わくはその愛車が、物置で寝てしまうことのないようにして欲しいと思う。

私は自転車とのつきあいはあまり長くはない。六年程である。それが何故これほど自転車好きか、答は簡単である。一緒にいる時間が長いから。日に一度はサドルにまたがらないと夢見が悪い。アメダスが、今日は雨だす」といっても私には関係ない。満員電車でスッ詰められるよりは、氷点下の風に吹かれた方が好き。帰省は、もちろん自転車。百五十kmの道のりを約九時間で走

る。峠道は自転車の醍醐味、時速八十kmを越える下りが快感?とんでもない、そんな貴方はまだまだ素人、ダラダラ長い上りが最高! Beyond Descriptionとはこのときの心境、あえて言葉にするなら癖になりそうなエクスタシー、のぼりつめる快楽の世界。愛車がパンク、ここで即座に自転車屋が開業できれば、貴方には知恵と勇気がある。ショップにかけこむのはブルジョア、そのまま乗っているのはタダのサディスト。タイヤはデリケートだ。注意をはらってもはらいすぎることはない。高いタイヤを買うべし、消耗品だと思つて馬鹿にする痛い目を見る。タイヤは命をのせているのである。都会の道は意外に凹凸が多い。細いタイヤの自転車にはトラップの大安売、最近では田舎の道の方が上等である。あの中島に走ってもらいたいくらいだ。ただしトラック街道は例外中の例外、醜悪の極みだ。自動車とは競争してもキッスはするな、相手は鉄の固まり、ぶつかつて痛いのは自分、ぶつかる瞬間には保険はクソの役に立たない。ブレーキのきかない自転車が多すぎる。貴方の愛車は大丈夫か、車は急にとまれない、自転車はもっと停まれない。信号くらいは守つた方がいいと思う。自動車を運転していて事故ると、どんなに注意していても前方不注意と業務上過失がついてまわる、自転車だって甘くはない。いつまでも交通社会弱者だと思つているのは、大き

な間違いだ。だいぶ話が辛くさくさくなってきた、この辺で視点を変えよう。自転車にのると風においのあることがわかる。ホコリのおい、ガソリンのおい、何か食べ物のにおい、花のおい、草のおい、森のおい、雨雲のおい、人のおい、かげろうのおい、挙げていけばきりがなしこれがツーリングのたのしみでもある。しかし日々の生活でもおいを楽しめる、今日の農大は何か素敵なにおいがするなあと思っているとふんずけた山羊のンコだったりする。注意されたい。自転車にのると見えなかったものが見えてくる。5kmも走れば数えきれない程の発見が貴方をまわっている。世田谷は、いや地球上の何処でも自転車に乗ればワンダーランドになる。何もかわったことはないって？ 気の毒に、五感がマヒしているのかもしれないよ、感覚の羽をひろげよう、もっとエモーショナルに、もっとナーバスに、精神がどんどんプリミティブな時代へ逆行を始める、もうそろそろ貴方にも時計をぶら下げた兎が見えてくるはずだ。あれっ自転車の話はどこへ行っただ……。

## スポーツ大会

二年 バレボル

大学に入り、早くも二年が過ぎようとしている。確かに一年の春過ぎ、スポーツ大会の選手を探している奴がいて、別に参加する人もいなかった。高校時代少しバレーボールをしていた私は、運動不足の解消としても参加したかったが、まず同学年と一緒にプレイする奴もいないし、一緒に参加しないか？と話しかけても皆返ってくる言葉は一緒だった。私は一人ぶらぶら体育館周りを歩いていると、丁度畜産学科のバレーの試合というところで、体育館へ足を運んだ。中へ入ってみると、結構応援する人が多くないのに気づいた。そして私は、二階へ上がり見下した。男子の試合を見ているうちに仲間が一人混じってプレイしていた。たまりかねて、下へ降りてゆき、コートサイドで見ている。この時、来年はこの人達と一緒にプレイしよう”と思った。それは、すごく楽しそうだったからだ。これこそ”後悔……”てやつだなと思った。

それから一年……。

いうことは時には人を臆病にさせる。知らないからこそそこへ行くのだから、あとは運を愛車と天に任せてペダルをふみこむだけである。風を切る、山を越える、川を渡る、そのうちロードマップが鳥瞰図になればしめたものだ、あとは自分の行きたい方向へと重心を傾ければよい、彼女達（自転車のこと）がいれば、空を飛ぶことが出来る。

自転車はシンブルゆえに美しく乗り手に正直な乗り物である。百万を越すロードレーサーも、一万五千円で手に入るシティサイクルでも要は乗る人である。その人の自転車に対する態度がいやがおうでも露見する。自転車は愚痴ひとつこぼさない、それでも乗る人に対していつも語りかけているのである。貴方は愛車を泣かしているか？ 魅力的な自転車とは持ち主に愛されているからこそなのである。

私は、一つのコートで一年前のメンバーとプレイをしていた。私は今まで高校の部活動で、バレーボールの楽しみを失いかけていた。バレーボールも見たくない時期もあった。しかし今は、とても楽しくプレイをしている。これは何もかも一緒にプレイをしている仲間があった。初めて出会ったのが早朝練習（試合）の時、昨年見た顔ぶれがあり、確かあの人が〇〇のポジションで……。鮮明に思い出された。そしてその先輩達は、すごくいい人達で、すぐその日のうちに溶け込めた。すぐうれしかったし、すぐやる気もわいてきた。その次の日には、さすがに一年も経つと、誰がバレーボールをしていたかなんてことはすぐにわかるのですかさず彼らに話かけた。すると結構皆は、やる気を見せた。うれしかった。バレーの好きな奴らと一緒に楽しくプレイできるのかと思うと、一日一日がまさにバレーボール色をしていた。今、横を見るとセッターのYがいる。コート全体を見ると、仲間がいる。多少のミスなどエヘラエヘラと笑ってごまかし、決めた時は、あふれんばかりの感情を表へ出せた。この時”ああ、バレーをして良かったな”と思った。一点一点の重さより、仲間と一緒にプレイしたり応援したりする時の重さの方が、とても大切にさえ思えた。私は、バレーボールは、あまり上手な方でないので、コートサイドで応援する方が多かった

が、それでも十分満足していた。かえってプレイをしているかの様にさわいでいた。結果としては、第二回戦の第三セットのコートチェンジ前まで勝ってはいしたが、その後逆転されてしまい、私の楽しい時は、その瞬間終わった。しかし皆言うことは一緒だった。又来年頑張ろうと。そして、私は、来年こそは、一試合でも多く一セットでも多く、仲間と一緒にバレーボールをしたいと思った。だから新入生の皆さんや、先輩方で、バレーボールを好きな人達は、できるだけ参加してもらいたいんです。他のスポーツもあわせてです。そしてそこで知り合った人達は、同じ学科の先輩でもあるし、後輩でもある。横のつながりも良いが、縦のつながりもとても良いものがある。私は、バレーボールをして多くの先輩と知り合い、そして今では大変良くしてもらっている。やはり一緒にプレイした人達なので、大変うれしく思っている。こんな文章でも、読んで一緒にプレイしたいと思ってる人は、今度のスポーツ大会で、私の顔を見ることができらう。



## 私の体験から

一年 吉田春昭

畜産学科に入学して晴れの大学生となった私はさつそくサークルに入ろうと固く決意を決めていた。中学、高校とテニスをしてきたので大学では遊び程度のテニスサークルへと決めていた。しかし実際に気に入ったサークルもなく、なんとなく入ったあるサークルでもじきに幽霊会員になってしまった。

そんな私もやはり大学生活は積極的にいこうという決意が心の底では漲っていたので学科オリエンテーションの折、畜友会が行ったイベント？を半信半疑で聞いていたが、下手なサークル活動をするよりもやりがいがあるのではないだろうかと考えて晴れて入会することにしたのである。

最初は私自信もおもしろ半分を始めようと考えていたのだが、しだいにその組織の充実していることには驚いたのである。大々の行事はやはり名物の収穫祭とその後に行うことになる体育祭の参加にあるらしい。

私はバイトをしていたこともあり実際には半分も力を

貸すことができずに人にまかせきりとなってしまったのだが、開催が近づくにつれて次第に忙しさを増して、夜中まで活動が続いた。活動内容はバレーボールのみこし作りと体育祭関係、劇を行ったりする特別企画に北門装飾、家畜苑などいろいろなことを行うことは大学生活の中で思い出に残ることになると私は思ったのだ。サークルかこういう畜友会に入らないとそれこそ四年間もの間充実して過ごす時間というのはテストの前日以外には特にないし、収穫祭のおもしろさも半減するに違いないことは絶対であろう。

その他にもスポーツ大会に参加したり、新入生歓迎レクをしたりして一年間が大変充実しているということとで下手なサークルに入ってしまったら思っているならば一度ためしに顔を出してみたい。先輩はいい人がたくさんいるし、研究室の話聞けたりして別の面でもお世話になれると思う。自分自身の力をためす意味でも、こうした行事に積極的に参加するという形で示してみたいかどうか。

もう一つ厚木の集中実習のことを話しておく（私の体験談）、昨年度は実習の半分を雨に打たれてしまい、朝の草刈りもろくに出来なかった。そんな中で私は印象に残ったことの一つとして中小家畜の実習日に第三豚舎を清掃したときのことである。

この日も朝から雨にたたられた。午前中はそんな訳で豚舎の窓ふきだったが、実家はサラリーマンだったので豚と近くで顔を合わせるのは初めてである。豚舎の外窓はきれいになった。さて問題は内側である。寝ているとはいっても100kg近くありそうなのが中で横になっている。窓をふいても後からどつかれるのではという恐怖で力が入らなかつたが案外おとなしい。ほんの数十分で慣れてしまうものである。もう一つ困ったことに豚を移動させる時にやさしく声をかけて耳の後ろでしたか、たたいて移動させなさいと言われた時だった。

「ハイどいて〜」とか「ちょっとおきて〜」とあまい声をかけてやる。こればかりは畜産以外の友達には見せられない姿である。

さておき午後はいよいよ第三豚舎の清掃である。まず臭う。これにはまいてしまった。それでも子豚やうりぼうが目に映ったので少しは安心した。「今日は糞量も計ってくれ。」と言われたのでほうきとスコップでかき集めた。すると何を思ったのか豚たちが糞やスコップをつつき始めたではないか。あとでみんな話合せて多分糞にエサが混じっているのではないかと一つ一つの結果を得ることができた。ふと一番向こうに一段と大きくかこつてある所がある。内に大きく育った猪豚が入っている。清掃者は今度ばかりはジャンケンにゆだねられた

## 収穫祭を終えて

一年 廣田 武司

東京農業大学に入ったからには、90回以上も続いている伝統のある収穫祭には参加しようとは思っていたが、収穫祭が近づいてきた時には、参加するのは辞めようかなあとも思った。なぜなら私は収穫祭について、何も知らなかつたからです。でも今年是一年だから仕事はそんなにはないだろうし、ただ収穫祭というのは、どんなものなんだろうというぐらいの参加するというよりも、手伝いをするというような軽い気持ちで、参加したのである。でもこれが前夜祭・特別企画・体育祭といういろいろ手伝うことがあって、思っていたより忙しいし、疲れるし、夜は遅くなるし、もういやになっていたが、先輩方は私よりもよっぽど忙しいし、疲れているはずなのに、「がんばろうな！」と声をかけてくれました。その声にはげまされて、私もそのうちに疲れなんか忘れていました。

このように先輩方にはげまされながら、準備をした日々が長い間続き、いよいよ収穫祭。長かった準備がら

のである。まず迫力が違った。選ばれた戦士二人は高い囲いを乗り越えて入った。スコップをかまれつなぎをバクリ糞を集めるのもひと苦労だった。作業後の姿はみな糞まみれであった。もう臭いのはいうまでもない。その後の洗たく機の中の水の色もいうまでもない。私たち自身もひどかつたのでその日は本当に大変だった。それでもちやうどオリンピックと重なったこともありロビーでみんなテレビに目を向けたりもしたことで疲れた作業のことも忘れていた。

集団行動をとることとは大変印象に残ることが多いと思うがその中でも実習のことは、普段の生活リズムの中に変化を受け畜産学科に染まるという点で実に充実したことを覚えていて。

そんなことで最後に少しばかりしか話せなかつたが、会室に来るといろいろと話しができるので男女を問わず私は畜友会に協力してほしいと考えたのである。

そのように前夜祭・特企・体育祭と、あつという間に収穫祭は過ぎていってしまったのである。収穫祭がすべて終った時に、辞めようなんてバカなことをなんで思つたのだらうというぐらいに、本当に参加して良かったと思つた。

私のことをはげましてくれた先輩方、本当にありがとうございました。

## In the distance

四年 サンバ 浅水

バイクというものは、ものすごく自由にさせてくれる乗り物だ。車の様にそれ自身で立っていることはできず乗っている人間にも自然環境の変化を、これでもかというまでに、叩きつけてくる。雨に涙し、風に驚愕し、凍てつく寒さに心を引き裂かれる。しかし、バイク乗りは相棒を駆ることをやめない。遠い地面を見据え、まだ何故これほど肉体を強いる。と、逆境の立場をもてあそば様にスロットルを開け続ける。一度でもバイクに跨がった者は、熱い視線を浮べ、時折のぞかせる母なる太陽の光を、そっと包み込むように、安堵の園を見つづけるからだ。

イグニッションをオンにし、アクセルを軽く2、3回あおり、エンジンをかけてやる。澄んだ空気をいっぱい詰め込み、それが気化器でガソリンと混ざって奴の心臓へと飛び込んで行く。静寂を断ち切ることが、一つの儀式であるが如く、元気良く目覚める。安定した鼓動を響かせるには、まだまだもう少し時間がある。タバコを一本吸

い終わる頃には、きつと落ち着くだろう。ポケットから折れ曲ったタバコを取り出し、指の腹でやさしく伸ばしてやった後に、おもむろにジッポで火をつける。辺りにはオイルの臭いが矢庭に立ち込める。深々と吸い込んだ煙を相棒にも楽しませ、そつとシリンドラーへ手やる。ハートが熱くなってきた。彼を取り巻く全ての環境がストップモーションになる。煙草を揉み消し、シートに跨がる。相棒は拒否しない。そればかりか後部シートには荷物が満載されている。シュラフ、テント、ガソリンストープ、その他ほんの少しの生活用具と、穴のあきかかったシュラカップ、排ガスやコンクリートにまみれた街並みと、満ち足りた生活を忘れさせてくれる、最小限の荷物だ。

彼の相棒は、工場で大量生産されたものであるが、単なる機械ではない。工場でつけられた油をそつと拭い去る様に、少しづつ、また少しづつ垢を落とし、自分へと近づかせたものだ。エンジンのビートは彼の心。ピストンはアップテンポで踊り、カムは唸りをあげ、バルブは必死に喰らいついて行く。そんな、奴の叫びを聞きながら、バイク乗りはハートビートを奮い上げ、魂を同調させることに努める。魂が確実に同調した時、彼等は一体となり、奴の血は、駆る者のオイルとなる。金属の擦れ合う音、サスの軋む音、タイヤのバターの一つ一

つが路面を噛む音、全てが透明な世界から、現実へと引き戻される。

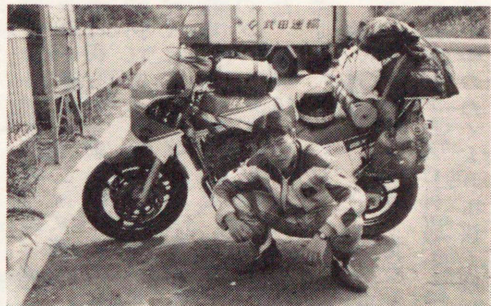
旅の始まりは、見慣れたものが斬新なアートに見えて来る。感じる。久し振りの体触に彼は心地良い陶醉と、驚喜に落ち入っていた。街を出た時からその感情は高まるばかりだ。道路に並んで咲いている白い花、それだけが彼の心を現実と夢想の狭間に繋ぎ止めていた。彼は更にアクセルを開けた。ゆっくりと楽しむ旅ではない。風の叫びを聞き、自分の心に取り込むんだ。ワイド・オープンを待ち受けるロード、広がる青い空、彼の満足するものだった。どれくらい走ったろうか、草が醸し出すハーモニーが聞こえて来た。見渡す限りには何も無い。彼は街を出る前から、こんな場所にテントを張ることに決めていた。オドメーターに目をやると、街を出てからすでに二百マイルは走っていた。テントを張り終わり、煙草に火を点けると、満天の星空が広がっていた。星々のファンタジーに身を包み、彼は幻想の奥へ入っていた。結局は、いつも走りまわって未知の世界での孤立を楽しむだけなのだ。

遠い過去を、そして未来を彷徨う様な深い眠りは、ゆっくりと朝に向って覚めて行く。東の方向に向けておいたテントの入口付近が、ほんのり白んでいる。シュラフの中のぬくもりに快く疲れた体をまかせた空間を、

そつと押しやり、大きく背のびをする。わずかに開けたテントの入口から、朝もやと複雑に絡みあった目眩い光が手を差し伸べる。ひんやりとした朝の空気の中に、わずかに残った一等星と細くなった月が、ほんのり赤い空で交差する。彼は、ゆっくりとそして深く、朝の清冽な空気を取り入れた。体を包んでいたシュラフを剥ぎ取り、のそのそとテントの外にはい出した。ガソリンストープに火を点けると、小川の水をくみ、コーヒーを沸し始め、煙草を燻らした。澄みきった何も阻むもののない大地の片隅みで、彼の発つ生物音とコーヒーを沸す音だけが響き渡る。夜が明ける余韻を楽しむ事なく、彼は手際よく荷物をまとめる。彼を一晚包んでくれた全てのものが整然と片付けられた。冷めかかったコーヒーの残りを一息に飲み干し、カップを荷物の脇に押し込むと、昨日の朝街を出る時と同様に、相棒のハートに火を入れた。そして昨日と同じように二本目の煙草を消す頃に、相棒と彼のハートは同調し始めるだろう。心も体も光も鳥も、一日に向かって動き出した。彼はバイクに跨がった。

明日の事は考えない、昨日のことは今すぐ思い出すとしない。今日を、今を、この瞬間をどこまでも走り続けられ、それでいいと思った。

終わりのない道の向こうに、きつと何かが待っているから……。



リオにて

著者紹介・サンバ浅水、ブラジル国籍を持つナゾの男、Z2のライトを移植したノンカウル、丸目1灯の奇妙なGSX1750Rを駆る。ツナギは銀色で、観光地においてウルトラマンと言われ、バカにされる。

### Summer Course Bluese

三年 Mr. みたんかえ?

長い試験がようやく終わり  
うれしいはずの夏休み  
みんな海へ行こうって立てた予定に  
サマーコース  
みんなはオイラを置いていった  
ついてないぜサマーコースブルース

夏の陽射しに苛酷な運動  
耐え切れずに日蔭で一服

それを教師に見つかって単位はやらんぞ  
バカやろう

やる気があるのかって言ったんだ  
やる気なんかねえぜサマーコースブルース

日頃の運動不足がたたり  
毎日毎日筋肉痛

運動場の真中でひたすら走って  
ゲロ吐いた

オイラが何をしたっていうんだ  
どうすらいいのさサマーコースブルース

### 研究室だより

#### 家畜飼養学研究室

「良いタネ、良いエサ、良いカンリ」 畜産で成功する三要素である。特に主産物価格の70〜80%を占める飼料部門は大きな役割を担っている。高い生産を目指し、家畜飼養学は家畜管理学、家畜栄養学、飼料学を主な柱として成り立っている。

当研究室では、これら複合分野の基礎をふまえ、杉村敬一郎教授、亀岡暄一教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼養管理、飼育管理当について種々の研究活動を行っている。

研究室行事としては、富士農場における畜産実習、群馬県畜産試験場、浅間育成牧場に於ける家畜管理実習ならびに、一般飼料成分分析演習等を行っている。また室員相互の親睦を計るために、収穫祭の文展・模擬店への参加、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

昭和六十三年  
畜産学  
卒業論文題目

学籍番号	氏名	論文題目	教員
〒85007	足立 紀子	リジンの過剰添加が幼雛のエネルギー代謝におよぼす影響	杉村 伊藤
〒85010	池田 孝司	高水分サイレージの開封後の保存条件、特に温度が化学的組成におよぼす影響	栗原 萩原
〒85015	石和田研二	環境温度の日変動が子豚の消化におよぼす影響	池田 伊藤
〒85018	市川 真紀	スレオニンの過剰添加が幼雛の成長および体蛋白質の蓄積におよぼす影響	栗原 栗原
〒85021	井筒 満枝	環境温度の日変動が鶏(中雛)のエネルギー代謝におよぼす影響	伊藤 栗原
〒85029	江原 正樹	リジンの過剰添加が幼雛の成長および体蛋白質の蓄積におよぼす影響	杉村 伊藤

チ85 033 太田 力 スレオニンの過剰添加が幼雛の成長および蛋白質の消化、吸収におよぼす影響 栗原 亀岡

チ85 047 金子 剛 高水分サイレージの開封後の保存条件、特に密度が品質と嗜好性におよぼす影響 萩原 栗原

チ85 066 小松原 潤 成兔における消化試験の予備期間の検討 伊藤 栗原

チ85 093 高橋 幸宏 高水分サイレージの開封後の保存条件、特に温度が化学的組成におよぼす影響 萩原 栗原

チ85 107 寺井美香子 主題・反芻家畜の蛋白質の利用機構について  
副題・代謝蛋白質のアミノ酸組成 亀岡 栗原

チ85 151 三宅 基子 牧草の乾燥法の相違が化学的組成におよぼす影響 伊藤 栗原

チ87 602 杉山 悦也 高水分サイレージの開封後の保存条件、特に密度が化学的 萩原 栗原

チ87 604 林 哲也 採卵鶏における給支飼料の形状ならびに添加物が消化管内酵素活性におよぼす影響 淡谷

チ85 071 小塚 太郎 環境温度の日変動が子豚のエネルギー代謝におよぼす影響 伊藤 池田

チ85 088 篠原 祐治 環境温度の日変動が子豚の増体重、飼料摂取量ならびに飲水量におよぼす影響 伊藤 池田

チ85 091 末信 浩二 環境温度の日変動が子豚の呼吸数、心拍数、皮膚温ならびに体温におよぼす影響 伊藤 池田

### 家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、特に血清学、細胞遺伝学、分子生物学的見地から広範囲にわたり研究活動が実施されています。

チ85 020 市原 裕子 ポリアクリルアミドゲル電気泳動法による豚血液蛋白質糖素型の分析 田中

チ85 031 近江 俊徳 オーミニ豚の血液蛋白質・酵素型に関する研究 田中

チ85 036 大森 信 ウシ血清蛋白に認められる電気泳動的変異の分析 天野

チ85 035 川田 智弘 無翼鶏の形質発現に及ぼす初期孵卵温度の影響 平井 田中

チ85 076 柴田 英晃 雄日本ウズラにおける性成熟に伴う血中及びクロアカ腺内のテストステロン濃度の推移 田中 栗原

チ85 092 高橋 正美 ウシの血液型モノクローナル抗体の作製に関する研究 天野

チ85 096 多田 佳代 分染法を用いたウシ・マウス・ハイブリドーマの染色体分析 天野 栗原

当研究室では、柴田寛三教授をはじめ、田中一栄教授、天野卓助教授の指導の下に古郡実験助手、大学院7名、4年生21名、3年生26名で構成され、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれの目標に向かって頑張っています。  
研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や、毎週行なわれている定例委員会、ほかに、卒論等の研究、実験における問題点を解決する為、昼夜を問わず熱心に討論されています。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究の為、海外に出張されたり、また学生も他大学及び他研究機関に向いて研究を行っています。  
研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。  
因みに昭和63年度の卒業論文題目は次の通りです。

チ85 011 池田ゆかり 混飼放養下における構成動物の行動調査 田中 栗原

チ85 014 石山 俊 牛の白血球型に関する研究 天野



チ85 111	富田 研之	血液蛋白型支配遺伝子からみた水牛系統間の遺伝的差異に関する研究	天野
チ85 113	中嶋 郁朗	ウシ亜科数種の核型分析	天野 柴田
チ85 118	中山 雅恵	姉妹染色分体分染法による家兔の染色体分析	田中 柴田
チ85 119	長田 尚智	バリ牛の血液型と血液蛋白型に関する研究	天野
チ85 120	長沼 有俊	豚の白血球型に関する研究	田中
チ85 124	野口 裕治	トランスフェリン型支配遺伝子の分布からみた山羊集団の類縁関係	天野
チ85 126	林 智子	ウシの血液型モノクローナル抗体の作製に関する研究	天野
チ85 127	兵頭 広	ウシの血液型モノクローナル抗体に関する研究	天野

チ85 139	本多 圭子	ハタネズミの分染核型	田中 北原
チ85 147	水島 啓友	サラブレッド種の血液蛋白型に関する研究	天野
チ85 158	山下 哲	馬の血液型モノクローナル抗体の作製に関する研究	天野
チ85 164	横枕 正	等電点電気泳動法によるウシ血球蛋白・酵素の遺伝的多型に関する研究	天野
チ86 502	趙 昌衍	韓牛の血液型と血液蛋白型に関する研究	天野
チ84 001	青塚 直	牛群検定記録における産乳成績の母娘間の比較検討	田中
チ84 005	荒岡 郁人	那須牧場におけるホルスタイン種牛群の血統分析	田中
チ84 012	伊藤 信介	韓国在来山羊の実験動物化に関する基礎的研究	天野 柴田

### 家畜生理学研究室

現在、宇宙科学の進歩によって、地球がどのように形成されたかがわかってきた。地球は、宇宙空間にただよう細かいちりのようなものが集まり、約45億年前に誕生したと考えられる。その地球に生命が発生し進化が起こった。そして、進化の過程で色々な生物があらわれ又消えて行った。地球上で生物体が生命を正常に維持するためには、体内の恒常性が一定に保たれることが必要である。生理学とは、生物体の体内における恒常性に関する学問である。

我が家畜生理学研究室の主要テーマは次の五である。

- ◎家畜・家禽の内分泌生理に関する研究
  - ◎家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究
  - ◎家畜・家禽の体液に関する免疫学並びに血清学的研究(含モノクローナル抗体)
  - ◎家畜・家禽の細胞膜に関する研究
  - ◎家畜・家禽の担体蛋白質に関する研究
- 室員構成は渡辺誠喜教授を室長として、津田囑託教授、半澤助手、院生3名、四年次生16名、三年次生15名、よりなりたっています。さらに、我が研究室の大切な一員である飼養家畜は、めん羊、やぎ、うさぎ、モルモット、鶏、うすらと種類、飼育頭羽数、共に多くその

管理が日課になっています。研究室の年間行事としては、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などと、週一回の室の室員によるゼミ及び談話会、学外講師による特別講演会、富士農場実習などがあり、これらの成果を室報にまとめて発行しています。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ84 060	小平 和広	ソーセージ原材料肉に関する血清学的検索	渡辺
チ85 037	岡田美和子	緬羊の成長に伴う血清蛋白質特に免疫グロブリン(IgM, IgG)の濃度変化	渡辺
チ85 048	金子富美栄	馬赤血球膜のアミノ酸輸送蛋白質の検出	渡辺
チ85 040	折原健太郎	ニホンウズラのリンパ球幼若に対する特異抗血清の作製	渡辺
チ85 044	勝畑 智子	ニホンウズラのリンパ球幼若に対する特異抗血清の作製	渡辺
チ85 057	窪寺 裕子	ニホンウズラのリンパ球幼若化反応における系統間差異	渡辺

チ85 064 駒崎 剛一 鶏の産卵に伴う植物性凝集素 渡辺  
に対する凝集原の消徴に関する 研究

チ85 070 榊原 匡 ニホンウズラにおけるマクロ ファージの誘導とその特異抗 原性について

チ85 071 坂下 太 競争馬の競争能力と生理的緒 形質との関連に関する研究

チ85 049 上川内 幸 鶏赤血球中のCar<sub>1</sub>及びAs濃度 渡辺  
チ85 087 関根 直子 の生理遺伝学的研究

チ85 101 田林 裕子 鶏の角質部ケラチン蛋白の分 渡辺  
子量の差異

チ85 109 遠山 淳 軽種馬生産牧場の比較経営分析 渡辺

チ85 137 星山 孝男 鶏の羽毛並びに脚鱗の血清学 渡辺  
的性状に関する研究

チ85 149 三富 理和 卵黄ホスピチン及び血漿ホス 渡辺  
ピチンの生理化学的性状につ いて

チ85 167 吉田 豊 インビボとインビドロのブラ 渡辺  
ストシストの細胞数のちがい

畜産経営学研究室

当研究室は、新井助教、石岡講師の指導のもと、四 年生22名（うち1人は海外実習のため休学中）、三年生 29名で構成されています。  
わが研究室では、畜産の経営経済的な面の研究が主で いわば技術と経済の接点となる「経営」問題がとりあげ られています。  
研究室は原則として全員室員制をとっています。  
家畜はいませんが、毎日当番制があり、また酪農、肉 牛、養豚、養鶏、馬の五つの班のいずれかに必ず属する こととなっています。  
研究室の日常活動は、班別の自主的なグループ学習、 パソコン学習会、畜産簿記ゼミの三つで、以上はすべて 課外活動で、先生や先輩がその都度指導しています。  
三年生は夏休みに15日間の農家実習が義務づけられて います。決して楽ではないですが、農家の人々のやさしい 指導のもとで、一生忘れることのできない体験となり 畜産への関心が一層深まると思います。

域別変遷

チ85 080 新福 春美 南九州における複合畜産の課 新井  
題

チ85 081 杉岡 英二 牛枝肉の価格と格付に関する 石岡  
統計分析

チ85 084 鈴木 裕一 素畜・飼料・枝肉価格の変動 石岡  
と肉牛経営の収益性について

チ85 114 中島紀久雄 近郊酪農における飼料生産・ 新井  
調達の実態分析

チ85 116 中村 一晴 肉用牛の流通と生産者の出荷 新井  
対応

チ85 130 尾留川知枝 酪農経営における労働生産性 石岡  
とその要因

チ85 139 本多 加奈 牛肉価格と消費者の消費意識 石岡  
について（東京地区における 実態調査から）

パソコンや簿記は、これからの農業経営分析に欠かせ ないものであり、就職した先輩からもすぐに役立つとい るといわれています。パソコンソフトも完備し、図書や 統計資料も完備しつつあり、あとわれわれのやる気で 成果が決まるといってもいいでしょう。

学 籍 番 号 氏 名 論 文 題 目 指 導 教 員

チ85 009 安藤 緑 農村生活と「嫁不足」問題に ついて 新井

チ85 024 今西 俊郎 肉牛経営の生産費分析（宮崎 新井  
県の繁殖経営と今後の方向）

チ85 046 金古 健 群馬県下一養豚場の経営分析 新井

チ85 050 亀田 謙一 和牛繁殖地帯の立地移動につ 石岡  
いて

チ85 063 小林 憲平 豚繁殖成績の統計的分析 石岡

チ85 069 境 浩一郎 酪農経営における経産牛肥育 新井  
導入の意義について

チ85 074 佐藤 政和 新潟県における肉牛飼養の地 石岡

チ85 140 眞嶋 順一 乳質改定に伴う酪農家の対応 新井  
と変化

チ85 146 丸山 均 畜舎内の作業効率に関する研  
究（主に作業動線からみた） 石岡

チ85 161 大和 公一 経済的肉牛肥育経営の事例的  
研究（輸入自由化に対抗する  
肉牛経営の方向） 新井

チ85 165 吉田 尚恵 馬肉の需給と流通機構 石岡

チ84 087 鈴木 公哉 牛肉自由化に伴う生産対応 新井

チ84 104 田山 素子 カナダにおける牛乳の需給調  
整とその特質 新井

チ83 154 山田 隆明 アメリカの牛肉生産の歴史と  
現状 石岡

家畜繁殖学研究室

我が家畜繁殖学研究室は、主任教授の一戸教授をはじめ、石島教授、門司講師、桑山副手の指導の下、大学院生2名、研究生1名、四年生28名、（うち2名は海外実習のため休学中）、三年生21名の室員から構成されています。室員は各自の希望により次の班に別れます。

即ち、一戸教授、桑山副手の指導による家禽及び小動物班、門司講師の指導による大家禽班よりなり、精子・卵子並びに性ホルモン等について研究に励んでおります。なお、石島教授は本年より生物産業学部に転任されることになりました。

各班では、週一回のゼミナールを開き、文献を読んでの討論や卒業実験の説明など、お互いに知識を交換し研究をより一層中身のあるものにするよう努力をしています。

また、当研究室は家畜人工授精師の講習を受けます。たつても、普段から家畜の繁殖に関する研究にたずさわっている関係上、日常の飼育管理の中からも学びとれるものがあると思われまます。

研究の主要テーマとして「家禽、家禽及び実験動物の生殖リズムに対するホルモン及び環境要因の影響」「家禽、家禽及び実験動物の精子・卵子の形態と凍結保存」「体外受精に関する研究」「家禽の受精卵移植に関する

チ85 030 遠藤 美紀 家兎胚の染色体分析による性  
判別法の検討 石島

チ85 045 加藤 智 豚精子の凍結保存における副  
生殖腺液の役割について 門司

チ85 056 草場 庸行 アルミバックを用いた豚精液  
の大量凍結について 門司

チ85 058 倉木 潤 野鶏の増殖に関する研究―特  
に本邦における繁殖期につ  
いて― 一戸

チ85 086 陶山 伸二 島根県における肉牛の繁殖の  
現況について 一戸

チ85 098 田中 勝美 乳牛の胎盤停滞の発生要因な  
らびにこれが泌乳と子宮回復  
に及ぼす影響 小林

チ85 103 塚本 渉 豚精液の凍結保存における界  
面活性剤の添加が精子生存性  
に及ぼす影響 門司

る研究」と様々です。  
その他、わが研究室では、コンバも多くひらかれますが、大人数のわりにはまとまった研究室です。特に収穫祭においては、一層の団結力を見せ毎年その成果が発揮され優秀な成績をあげています。

学 番号 氏 名 論 文 題 目 指導 教員

チ85 002 相原 喜嗣 乳牛の発情回帰および受胎率  
と乳成分―特に乳蛋白含有率  
との関係― 小林

チ85 005 浅水 雅一 牛卵胞卵子の体外受精及び体  
外培養―特に精子前処理の違  
いによる受精率の比較― 門司

チ85 012 石川 聖浩 豚卵胞卵子の体外成熟及び体  
外受精 門司

チ85 023 今井 利行 スナネズミ2細胞期胚の体外  
培養に関する研究 石島

チ85 026 内田 憲治 岐阜地鶏母鶏における雛の存  
在が卵巣機能回復におよぼす  
影響 一戸

〒85 106	土屋 博文	乳牛の初分娩月齢が乳量、発情回帰および成長に及ぼす影響	小林
〒85 108	寺川恵美子	ビデオ装置を利用した山羊精子の運動性について	門司
〒85 129	廣瀬 輝明	マウス4細胞期胚の2分割による一卵性双子作出に関する研究	石島
〒85 131	深津 弘行	体外受精由来牛2細胞期胚の電気的細胞融合条件の検討と融合胚の体外発生能	一戸 岩崎
〒85 132	福澤 輝三	牛囊腫卵胞壁の微細構造と卵胞液中トリグリセライド含有量の比較	一戸 吉田
〒85 136	古谷 栄	去勢雄ウズラのクロアカ腺機能に対するテストステロン代謝産物投与の影響	一戸
〒85 152	宮下 健彦	胚集合法によるウサギのキメラ作出に関する研究	石島

畜産物利用学研究室

本研究室は、室長の山中良忠教授をはじめ、鶴田文三郎嘱託教授、古川徳講師、松岡昭善講師、飯山禮文副手の5名の先生方の御指導のもとに、大学院生3名、4年次生32名、3年次生38名、2年次生1名の室員がそれぞれ自覚を持ち活発なる研究室活動を行なっています。研究テーマは大きく次の五つに分けられます。

- 食卵の利用と品質低下防止に関する研究
- 発酵製品の製造法と発酵中の変化に関する研究
- 食肉の肉質に関する研究
- 食肉の肉種鑑別にに関する研究
- 畜産物の高分子物質の生理活性性について

また、加工利用では、消費者に対して有効でよりソフトな食品の開発に取り組み、さらに加工所における実習を通じて製造設備、製造技術への理解を深めることにも努力しています。

その他の主な活動としては、月例セミナー、新入室員歓迎会、酸乳飲料製造実習、収穫祭の文化学術展、模範店（ロースハム、プリン等の製造実習を通じて）への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などがあり、こうした行事には、素晴らしい団結力を発揮し活動しています。

〒85 155	守屋 敦夫	過排卵誘起チャイニーズハムスターの排卵時間および卵子の分割進行程度	石島
〒85 162	山谷 行毅	牛卵胞卵の体外受精および体外培養—特に培養系の違いによる発生能について—	門司
〒85 166	吉田 直樹	牛囊腫卵胞壁の微細構造と卵胞液中コレステロール含有量の比較	一戸 吉田
〒86 501	権 五龍	ガラス化 (Vitrification) 保存したマウス初期胚の融解法の検討並びに培養・移植試験	一戸 河野
〒87 601	大場 淳子	陸インピーダンスによるホルモットの排卵時期の推定	石島
〒87 603	高橋 尊	血小板数を指標としたラットの早期妊娠診断法の検討	石島

学号	氏名	論文題目	指導員
〒85 001	會田 秀樹	雌、去勢雄及び無去勢雄インブタの枝肉成績並びに理化学的性状の差異	松岡 山中
〒85 003	相原 克也	加圧下におけるミオシンBとWPC (ホエー濃縮蛋白質) の相互作用について	松岡 鈴木 (敏)
〒85 004	秋山 啓太	ホルスタイン去勢牛筋肉の色特性	松岡 佐藤 (光)
〒85 016	泉 昌史	各種家畜肉筋漿蛋白質の等電点電気泳動像の比較	松岡 天野
〒85 019	市川 光晴	各種ホエーのホエー蛋白質区分の差異について	古川 山中
〒85 022	伊藤 嘉英	ケフィール粒構成菌体のT細胞活性性に及ぼす影響	古川

チ84 106	千葉 仁史	電気泳動法による可食動物肉の筋漿蛋白質及び酵素パターンの差異	松岡 天野
チ85 169	渡部 保	腫瘍転移におよぼす乳酸菌給与の影響	古川 山中
チ85 157	八木 英章	多糖産生菌の給与が腹腔内マクロファージ活性に及ぼす影響	古川 山中
チ85 148	水野 交子	遅延型過敏症反応および溶血ブランク形成細胞数に及ぼす多糖産生菌給与の影響	古川 山中
チ85 143	松本千夏子	粘性菌からの多糖生産に及ぼす培養条件の検討	古川 山中
チ85 135	布施 智子	ケフィール粒給与がトランスフェリンに及ぼす影響	古川 山中
チ85 123	西川 路子	桃園種×デユロック豚の枝肉成績及び理化学的性状	松岡 山中
チ85 065	小松真一郎	多糖産生菌の給与がT細胞活性に及ぼす影響	古川 山中
チ85 043	梶原 英司	ケフィール粒多糖及び構成菌体が腹腔内マクロファージ活性に及ぼす影響	古川 山中
チ85 042	梶 良成	卵白中の生理活性物質の検索	古川 山中
チ85 041	角橋 則孝	発酵乳製品の給与がマウス血清トランスフェリンに及ぼす影響	古川 山中
チ85 035	大瀧健太郎	市販飼料を給与した桃園種×デユロック豚の肉質に関する研究	松岡 鈴木 (伸)
チ85 034	太田 伸久	加圧下におけるミオシンBとWPI(ホエイイオン交換蛋白質)の相互作用について(敏)	松岡 鈴木
チ85 032	大井 淑子	濃縮ホエイ蛋白質のゲル形成性について	古川 山中

チ85 083	鈴木 希	抗腫瘍効果を指標とした多糖産生菌の生理活性について	古川 山中
チ85 088	瀬野 英樹	牛乳及び山羊乳のレンネット凝固特性について	古川 山中
チ85 089	高篠 裕昭	ホロホロ鳥肉脂質の構成脂肪酸組成について	古川 松岡
チ85 090	高橋 淳	ミオシンB抗原による免疫学的研究	古川 天野
チ85 095	田添 栄	各種添加物がソーセイジの品質に及ぼす影響	古川 松岡 山中
チ85 100	田上 和之	グロビン抗体による肉種鑑別に関する基礎的研究	古川 天野
チ85 105	土屋 和子	ケフィール粒多糖のT細胞活性に及ぼす影響	古川 山中
チ85 121	成瀬 泰久	山羊乳チーズの製造法に関する基礎的研究	古川 山中

家畜衛生学研究室

本研究室は、東量三教授、近江弘明助教授、渡邊忠男講師、各先生の御指導のもと、4年生28名、3年生27名、1年生1名の室員が一体となって活発なる研究室活動を行なっている。

研究室活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の4班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び糞尿処理、環境衛生などの研究を行なっている。

また本学家畜診療所においても一般外来動物の診療を中心に各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の活動内容は、年間行事を通して新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加(文化芸術展模擬店)、研修旅行、送別会、ゼミナールなどがある。

このような、多面活動において学生生活の充実を計り室員各自の個性を引き出し、その個性をもちより研究室独自の個性を創造するという事に我々は目標をおいている。

学 番	氏 名	論 文 題 目	指 導 教 員
チ85 025	岩下 淳一	豚の成長に伴う歯牙の組織学的変化について	近江 鈴木

チ85 163	弓削 芳子	沖繩県宮古島における肉牛の 内部寄生虫卵保有状況	近江
チ85 159	山下 俊也	豚の成長に伴う歯牙の形態的 変化	近江 鈴木
チ85 154	森田 秀秋	愛玩動物飼育家屋内に生息す る衛生害虫の検索	近江
チ85 153	森 まゆみ	犬の温浴療法に関する研究 薬用入浴剤の保温性について	近江
チ85 150	三宅 康治	沖繩県西表島における水牛の 内部寄生虫卵保有状況	近江
チ85 144	松本美枝子	動物公園内人工池の水質検査 について	東 近江
チ85 142	町井 博	鶏病原ウイルスの増殖に対 するホロホロ鳥発育卵の応用	渡邊
チ85 133	福田エリサ	内部寄生虫卵に対する松抽出 液(木酢)の発育阻止効果に ついて	近江
チ85 085	須藤 明	衛生害虫に対する松抽出液 (木酢)の忌避・殺虫効果	近江 荻原
チ85 077	清水 雅彦	日光遮断飼育下における家兎 の血液性状の変化	近江
チ85 075	座間 洋行	犬の衛生管理における遠赤外 線の応用	近江
チ85 062	小林 大平	犬の温浴療法に関する研究薬 用入浴剤の殺菌効果	東 近江
チ85 054	岸 哲夫	ヨード剤(PVP-I)によ る無空鶏舎の消毒効果	渡邊
チ85 038	小川 信子	猫の消化器疾患に対する生薬 (吐剤・下剤)の応用	近江
チ85 028	梅原 修	犬の歯石並びに歯槽骨付近分 泌物に由来する細菌、特にグ ラム陽性桿菌について	東
チ85 027	内山 純	井ノ頭池における水鳥の生態 について	渡邊

チ85 091	高橋 俊彦	ラットの精巢剔出後の臨床的 変化	近江
チ85 094	田下 恵	犬の予防衛生に関する研究 多価ワクチン接種後の臨床的 変化	近江
チ85 097	田中 章夫	ホロホロ鳥の発育に伴う血液 性状の変化	渡邊 西脇
チ85 102	千代延 宏	犬の歯周炎に関する研究、歯 石除去後の臨床的变化	東 近江
チ85 112	中家いずみ	馬房内寝糞、大鋸屑における 内部寄生虫卵の汚染状況	近江
チ85 115	中村 泉	鶏糞に対する松抽出液(木酢) の発酵促進効果について	東 近江
チ85 117	中村 牧子	馬の化膿性病変部その他から 得られた検体についての菌検 策	東
チ85 128	平林 直人	放牧場内溜池の水質検査につ いて	東 近江
チ85 168	若井 直美	犬の内部寄生虫に対する駆除 法の検討・生薬の応用	近江
チ85 170	和田 聖子	犬の歯周炎に関する研究・歯 垢の付着状況について	近江
チ85 707	福井 淳子	馬の四肢の外科病に関する研 究、局所性炎症に対する遠赤 外線の応用	近江

## 収穫祭だより

### 第96回収穫祭が終った今

三年 神 永 憲 一

一九八八年十月、今年も収穫祭のシーズンがやって来た。今年の収穫祭は、諸事情によって自粛することとなり例年にならない収穫祭となってしまった。そのあおりを最もうけたのは宣伝隊による宣伝活動であった。そのためいまひとつ盛り上がりにかけるところがあつたのは残念なひとつであった。

また今年の収穫祭は、ほとんどの役員とスタッフが素人だったので、はじまるまでとても不安でした。でもいざ始めてみると、各自が各部門で自覚をもって準備をしてくれたので、当初の不安は準備がはじまると消えてなくなりました。

十月五日、第96回収穫祭畜産学科統一本部が開かれたこの日から私にとっての収穫祭は、はじまりである。

まず最初に活動を始めたのは、体育祭のバックボード作製です。今年で三度目の収穫祭をむかえた私は、だいたいのやり方はわかっていたので一早くはじめることができた。なぜ体育祭のボードを早くはじめたかというところ

ボードの寸法は10m×4.5mというかなりの大きさであり時間と場所が必要であるからであった。まずはボードにチョークで下絵を書くのであるが、その日は研究室の団結式があり多少酔っていたので、後で見るとあまりきれいな書かれていなかった。他に宣伝隊のみこしも同じくらいに作業が開始されたが、こちらは、私と同様三年目なので手を出す必要はなかった。そのうち特企、北門、と準備が始まりだした。もうこうなると、作業所としている4号館共通実験室は手狭になってくる。こうなると一番場所を使う体育祭のボードがじゃまになってくるのでボードを早く書き上げる必要があるわけだ。そして体育祭のボードを作ったスタッフはこんどは、特企、北門装飾、家畜苑へと分散していき、みんな収穫祭を作り上げていきます。これが畜産学科のやり方で、これで毎年収穫祭を成功させてきたのです。また今年は初めて、準備期間中に炊き出しをやったのも良かった一つではないかと思えます。例年だと夜中まで作業をして食事は自己負担でしたが、食事といってもオニギリを作ることで食事にさく時間もへり、同じ釜のメシを食った仲という感じで団結力も一層増したのではと思います。

収穫祭本番も近づきだんだんと準備に気合が入り各部門ともできあがってきた。私は体育祭に参加してくれる人を集めることに専念した。一年生の時は声をかけてもみんな参加してくれなかった体育祭でしたが、二年生の時は、多くの人達が参加してくれるようになり、さらに

### 宣伝隊としての役目を終えて

三年 近 藤 満 之

今年は、こちらから声をかけなくても自発的に参加してくれる人が多くなりうれいものがありました。そして収穫祭も始まり一日、二日、三日と順調に進んで行き、体育祭当日がやってきました。昨年は雨で体育館でしかできなかった体育祭も今年は天気がよくグラウンドで行うことができ、去年のうっぶんを発散することができました。参加してくれたみんなも去年のうっぶんを発散できたと思います。またこの体育祭は、私がやって来た三年間で一番思い出に残る体育祭であり、三年間で一番成績の良かった体育祭でした。これも全て陰でがんばってくれた役員たちであり、また手伝ってくれた人達であり、それを見守って下さった先生方のおかげだと思います。

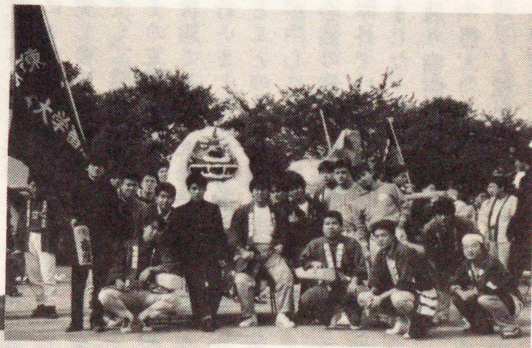
最後に収穫祭全体を見まわしてみると、三年間で一番最高の収穫祭でした。東京農業大学農友会第96回収穫祭畜産学科統一本部役員のみなさん、ほんとうにおつかれさまでした。また私のようないいかげんな統一委員長についてきてくれてありがとうございます。



今年度の収穫祭で、僕は宣伝隊の隊長を務めました。宣伝隊の仕事とは、収穫祭を一般の人に宣伝するのがその役割です。今年はお祭りなどの自粛ムードのため、従来のような派手な宣伝活動が出来ませんでした。僕にとつて実に充実したものでした。どこがどのようによく実っていたかといいますが、今まで行われてきた収穫祭でも、自粛は全く前例のないことでした。そのため学外での宣伝活動をどうしたら良いのか、当初は困り果てた状態でした。各学科の宣伝隊長が集まって何度も会議を行いました。今までの宣伝隊をやった事のない者がほとんどのため、僕のような宣伝隊をやったことのある者が中心になって話し合いが進んでいきました。度重なる会議の結果、今年には学内での宣伝活動は従来通り行い、学外ではピラと花や野菜の種を通行人に配って宣伝をしました。学外の宣伝活動は、経堂駅や豪徳寺駅そして桜通り商店街など農大近辺の数ヶ所へ行ってきました。「農大の収穫祭をよろしく願います。」とか言っただけで種を配ってきたわけなんです。こうやって自分の提案したことが取りいれられ、実際に行われていると

思うと嬉しくて仕方がありませんでした。又、学内の宣伝活動は昼休みのたった三十分という短い時間のため、午後の講義が始まるまでに終らせられるかどうか心配でしたが、予定通り十分前に終らせる事が出来て、皆で一緒に喜んでいました。僕は各学科のみこしの隊列を先導して歩いていました。学外・学内のパレードのどちらの時も講義はありましたが、先生に公欠扱いにして下さいました。こうして収穫祭の宣伝活動は、無事大成功に終わりました。あとは体育祭の夜のファイヤーストームですが、これも無事終わらせることが出来ました。その時の僕には、宣伝活動や畜産学科のみこし製作など、一ヶ月の間一日も休まずにやってきたことへの充実感でいっぱいでした。協力して下さいました先生方、そして学科の皆さん、こうしてやってこれたのも皆さんのお陰だと思っています。本当にどうも有難うございました。これからもよろしくお願いします。

僕がこうやって収穫祭のみならず、色々な行事に参加しているのは、思い出をいっばい作りたいと思っているからです。そして、卒業してから農大はどんな所だったかを聞かれても、堂々と胸をはって言えるようになりたいと思っています。僕にとって今年が最後ですが、もっと沢山の思い出を作っていこうと思っています。



## 前夜祭・特別企画委員長を終えて

三年 永田 憲明

第九十六回の収穫祭が終わった。私と収穫祭の付き合いは、二年生の時から始まった。二年生の時は、前夜祭と野外劇の大道具作りが中心であった。その時はただ劇に使うバックボードを組立て、下絵を描いてペンキを塗るだけであった。その事がかわれたのか、ただ委員長になる人がいなかったのか、第九十六回収穫祭の前夜祭・特別企画の委員長をやることになった。最初はそんな大役を私が務められるのかと、断っていたのだが最後には私がやることになったのである。

私の最初の仕事は、実行本部の会議から始まった。全学科の委員長が実行本部の注意や説明を聞くのだが、他の学科の委員長は収穫祭を一〜二年も経験している中で、実行本部の説明も大事などころだけを言い、詳しく説明してくれないので、何の事だろうと戸惑い困ることがよくあった。その後は会議と収穫祭に使う大道具や小道具作りの毎日であった。

畜産学科の特企本部全体の仕事は前夜祭の劇に使う台本作り、バックボードの制作、衣裳作り、特別企画のどの自慢の出場者の募集、ミスター農大、ミス農大、美人

コンテストの出場者の募集、野外劇の台本作り、バックボードの制作などが主なものであった。これらの仕事を始めたのは収穫祭の始まる二週間ぐらい前であった。

収穫祭までの二週間は毎日の様に夜遅くまでみんなが仕事をしていた。特に副委員長の三年の堀田さんと、特別企画担当の一年の廣田君には、感謝の一言である。堀田さんは女性ということで劇やミス農大、美人コンテストに使う衣裳作りを全面的に担当してもらい、まだその上にバックボードの制作までしてもらった。ただでさえ忙しいところをさらに忙しくさせてしまった。また、廣田君には、夜遅くまでバックボードの制作をしてもらい、その自分で作ったバックボードの前で劇まで披露してもらった。堀田さん、廣田君二人ともどうもご苦労さまでした。あまり頼りにならなかった私と一緒に最後まで準備をしてくれ、無事に収穫祭を終了させてくれてどうもありがとう。その他にも前夜祭と野外劇に出演してくれた一年生、のど自慢に出場していただいた石島先生と半沢先生、ミスター農大とミス農大と美人コンテストに出場してくれた三年生、陰で協力してくれた方々どうもありがとうございました。



## 家畜苑を終えて

三年 宮内 伸夫

今年も、パワーあふれる有志達によって家畜苑が作られ、何とか収穫祭を終える事が出来た。ここまでの道のりは、非常に長く険しいものであった。

まず最初に、有志が集まったのは、夏休み前だった。その時は、畜友会から家畜苑の集まりがあるというので畜友会室へ行ってみると、自分を含め三人しか集まっていなかった。自分は、十人位は集まっていると思っていたので、あまりの少なさに驚いた。

そして、その三人の中から、委員長、副委員長、会計を決めなければならぬといわれ、何だかよく分からないうちに、自分が委員長になっていた。

三人が三人とも、今回初めて、家畜苑をやるので、三人とも何からやればいいか分からず、大変な事になったと、不安を抱きながらも、十月になってからで、何とかなるだろうと、いい加減な気持ちでいた。

夏休みも終り、十月になって、いよいよやらなくてはいけないという気持ちになった。

そこで、まず、有志を集めるために、いろいろと誘ってみたが、みんな「大変だから」とか「面倒くさい」と

いう返事ばかりで、自分達は、あせるばかりだった。そんな時に、先輩からのアドバイスは、神の声とも思え、ありがたいものだった。

そして、自分達を見かねたのか、三年生が一人、二年生、一年生の有志が続々と集まって来てくれて、総勢十三人位になった。この時は、本当にうれしかった。特に後輩が、「先輩たちが、頑張っているのを見て手伝いに来ました。」と喋って来てくれた時は涙が出るほどうれしく、連日の疲れもふきとんだ。

家畜苑の作業は、収穫祭の一週間前から勝負で、毎日、夜中まで作業は続けられた。疲労と睡魔との闘いで、収穫祭に間にあうか不安だったが、有志達のパワーはたのしい限りであり、元気づけられた。

十月二十九日、三十日と、厚木農場と富士農場から、動物が来た。途中、車が故障したりハブニングがあったが、何とか無事に、動物達が届いた。豚や、子牛はおとなしくしていたが、ホルスタインの搾乳牛だけ落ち着きがなく、夜になっても寝ようとせず、散歩させたりして何とか落ち着かせようとしたが、なかなかうまくいかず心配の種だった。

十月三十一日、最後の仕上げで、看板を付けたりして夜中まで作業を続け、何とか収穫祭にまにあう事が出来た。みんな疲れきっていたが、完成した事で、ひと安心したようだった。あとは、動物たちの無事を願うだけだった。

十一月一日、ついに、収穫祭当日、昨日までのいそがしさに比べ、のんびりしたもので、拍子ぬけしたが、家畜苑の前の人だかりをみて、自分達の苦労は無駄ではなかったと確信した。

夜になると、収穫祭にはつきものの「酔っぱらい」が登場して、看板をけったり、牛のいる柵の中に入ろうとしたりして、人も牛もほとんど寝られず、本当に「酔っぱらい」には悩まされた。

十一月二日、動物たちはあいかわらず人気者で、元気にして、夜も「酔っぱらい」は思ったよりも現れず、ひと安心といったところだった。

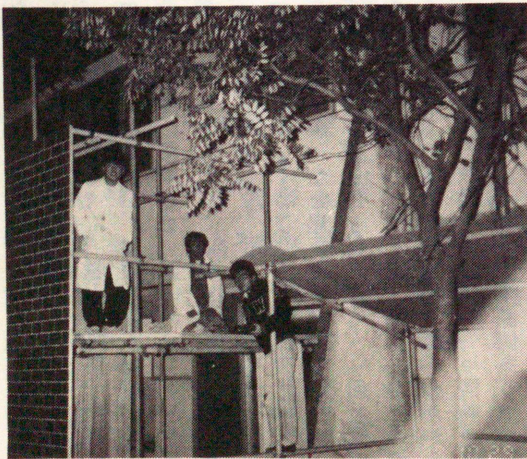
十一月三日、NHKが朝六時頃に来て、掃除や搾乳をしている所を生放送した。みんなこの時とばかり、ふだんは三人位でやっている搾乳を、全員で牛のまわりをとり囲んでやって、全国へ顔を売りこんでいた。

この日は、最終日ということにぎわいをみせ、動物たちも愛嬌をふりまき、お客さんを喜ばして、大盛況のうちは無事終る事が出来た。あとは、動物達を明日、家に帰してやるだけだった。

十一月四日、五日と動物達を無事帰し、片付けをして、すっかりきれいになって、やっと終わったという安心感と、家畜苑をやりとげたという充実感で、胸がいっぱいだった。

本当に、苦しかったけど、家畜苑をやった後悔してないし、楽しい事も沢山あり、最後に得た充実感は、やっ

たものでしか味わえないものだと思うし、沢山の思い出が出来て、家畜苑をやった本当によかったと思います。最後になりましたが、顧問を引き受けて下さった近江先生、樋口農場長はじめ厚木中央農場の方々、山中農場の方々。本当にありがとうございます。来年も御迷惑をおかけすると思いますが、その時はよろしくお願ひ致します。また、家畜苑をいっしょに作ってくれた有志のみんな、どうも御苦労様でした。



## 北門装飾を終えて

三年 畑

肇

「おつかれさん!!」大きなあたたかい声でみんなで声をかけ合い、今回の収穫祭が終わりました。

収穫祭約一カ月前から予定を組み、北門装飾を開始しやっとこさっとこ作りあげる事が出来ました。今回の収穫祭で忘れられない事が二つあります。一つはおにぎりの味、一つは友人のおもいやりです。家畜苑、体育祭、野外ステージのメンバーをはじめ、みんな連日徹夜の疲れ果てている中、各研究室の有志の女の子があつたかいおにぎりを作ってもってきてくれたのです。今でも忘れられない味です。あのあつたかいおにぎりは何よりの楽しみでもあり、僕自身の、また畜産学科の原動力となりました。女性の方々本当に御苦労様でした。さてもう一つ友人のおもいやりですが、私はいつもポケッとしている方で、仕事もなかなか捗らずまわりのスタッフから「畑、でいいのか?今のままじゃ終わらないぞ」と何百回と言われました。あせる一方でなかなか進みません。このような仕事は初めてで、絵も上手くない僕は困る一方でした。下絵は決まっていたものの、今回の北門は今

までにない通路路まで装飾しようとのビックな案だったので悩みに悩みました。そんな時、通称菊ちゃん、画家の純人、経験豊かな憲ちゃん、職人の関矢、そして研究室有志の志田君、田中君が、ふっと湧き上がるように現われ、北門の壁画、組み立て、ビックボードと各部門へ力を発揮してくれました。この時「本当に友達であったかいなあ、大事にしなれば」と、しみじみ感じました。今回の北門で、もしこのメンバーが一人でもいなかったら完成しなかったと思います。

最初、北門装飾の委員長といわれて、「何故俺が?!」と愚痴をこぼしてばかりいました。しかし今回の北門装飾という経験で多くの友人に恵まれ、深いつながりをもてた事が、大きな私の収穫です。何か一つ情熱を注いだがむしやらにやっつけていき、その中で価値あるものを見つけたすすばらしさは、体験しなければわからない醍醐味だと深く感じました。また自分で書くのも恥かしいのですが、何か夢中になってやっていたあの期間中、自身自身三年間の中で一番輝いていたのではないかと思っています。当日はみんなから「いいものができた」と言われ北門の顔であるビックボードでは、幼稚園の子供からお年寄りまでの人達に親しまれ、記念撮影もされる光景も見られました。弱冠風によって倒れるのではないかと心配しましたが、最終日までもちこたえ、無事装飾として

の役目を果たしました。

最後に今回手伝ってくれた方々本当にありがとうございました。また来年、後輩の方々が、すばらしい体験を通してながら、北門を作りあげていく事を期待します。頑張ってください。



## 第96回収穫祭役員及び参加協力者

### 本部

統一委員長 神永 憲一 (三年)  
副委員長 菊留 茂訓 (三年)  
会 計 李 忠 憲 (三年)

### 宣伝隊

隊長 近藤 満之 (三年)  
副隊長 木下 雅仁 (三年)  
会 計 吉田 春 昭 (一年)

### 前夜祭・特別企画

委員長 永田 憲明 (三年)  
副委員長 堀田 亜里子 (三年)  
会 計 廣田 武司 (一年)  
庶 務 吉良 佐和子 (三年)

### 体育祭

委員長 神永 憲一 (三年)  
副委員長 七條 弘史 (三年)  
会 計 岡田 純人 (三年)  
庶 務 芳賀 佳彦 (三年)

家畜苑

委員長 宮内伸夫(三年)  
副委員長 松田浩(三年)  
庶務長 難波欣也(三年)  
會計長 塩島光仁(三年)

北門裝飾

委員長 畑崎肇(三年)  
副委員長 岡賢成(三年)  
會計長 李忠憲(三年)

参加協力者

宣伝パレード

四年 榊原 匡  
三年 宮腰 雄一  
神田 雄岳  
岡田 純人  
関矢 高史  
沼田 洋一  
菊留 茂訓  
打越 秀一  
土屋 文明  
佐野 直樹  
小林 知周  
澤田 敏彦  
松村 光記  
木下 雅仁  
吉川 芳文  
中島 豊  
近藤 満之  
七條 弘史  
松田 浩  
白田 英樹

野外劇

保科 幸夫  
吉原 幸夫

総合参加協力者

四年 岩下 淳一  
相原 喜嗣  
石和田 研二  
加藤 智  
榊原 匡  
浅水 雅一  
市川 光晴  
塚本 涉  
松本美枝子  
池田 孝司  
太田 力  
町井 博  
三年 安藤 朋子  
岩崎 明美  
大友 昇  
小川 向希  
小野 裕也  
木村 道雄  
窪田 一志  
小林 由起子  
澤田 敏彦  
杉山 智太郎  
関 邦恵  
武谷 志津  
塚越 賢  
鳥山 雅庸  
井上 二郎  
大島 雪王  
岡田 純人  
小川美代子  
小山 恭徳  
吉良佐和子  
国米 かつお  
近藤 利樹  
志田 政憲  
鈴木 潔  
関矢 高史  
田中 茂穂  
土屋 文明  
内藤 知子  
入江 真一  
大谷 道生  
岡村 永子  
奥野 和則  
神田 雄岳  
楠田 淳  
小林 知周  
佐野 直樹  
島田 秀樹  
鈴木 友子  
高野 恵  
樽川 修  
豊田 誠  
中島 豊

前夜祭

堀田亜里子、廣田 武司、吉田 春昭  
吉原 幸夫、保科 幸広

特別企画

先生のど自慢大会

石島 芳郎 先生  
半沢 恵 先生

のど自慢大会

中村 牧子  
畑 肇  
井上 二郎

美人コンテスト

芳賀 佳彦

ミスター農大

近藤 満之

ミス農大

坂野 庸子

その他多くの参加御協力、  
ありがとうございました。

# 第96回収穫祭畜産学科統一本部決算報告

	予 算	決 算	差 引 残 高
統 一 本 部	150,000	178,954	△ 28,954
前夜祭・特別企画	40,000	22,530	17,470
体 育 祭	50,000	18,902	31,098
宣 伝 隊	50,000	28,695	21,305
北 門 装 飾	10,000	0	10,000
家 畜 苑	10,000	0	10,000
計	310,000	249,081	60,919

上記相違ないことを認めます。

第96回収穫祭畜産学科統一本部会計 李 忠 憲

昭和63年度畜友会会計監査  
 4年 石川 聖 浩  
 3年 堤 信 一  
 2年 金 井 勉  
 1年 橋 本 匡 司

# 第96回収穫祭結果報告

## 前夜祭・特別企画

総合順位

野 外 劇

先生のだ自慢

学生のだ自慢

”

美人コンテスト

ミスター農大

ミス農大

## 体 育 祭

総合順位

農大競馬

玉 入 れ

米俵レース

教授びんびん大レース

農大健児の意気を見よ

1/10マラソン

”

先生 学生

石 井 中 芳 近 坂

島 村 上 賀 藤 野

先 我 二 佳 満 庸

生 子 郎 彦 之 子

八 五 八 優 準 熱 八

位 位 位 位 位 位 位 位

四 四 四 失 五 六 十 五 九

位 位 位 格 位 位 位 位

綱 引 き  
 くらねるあそび  
 各科対抗リレー  
 ”  
 応援合戦  
 やぐら装飾

男 子  
 女 子

優 七 五 八 六

勝 位 位 位 位 位

畜友会だより

昭和63年度臨時総会報告

昭和六十三年七月七日、一号館特二教室にて昭和六十三年度畜友会臨時総会が行われました。

総会には、正会員58名が出席。特別会員の先生方も多数出席していただきました。議長には畜産物利用学研究室の会田秀樹(四年)が選出され、左記の議題が承認されましたので報告致します。

- 一、畜友会規約改訂案について
- 二、畜友会役員選出

昭和六十四年度定期総会報告  
(平成元年度)

昭和六十三年十二月十五日、図書館四階視聴覚ホールにて昭和六十四年度(平成元年度)畜友会定期総会が開催されました。

総会には、正会員69名が出席。特別会員の先生方にも多数出席していただきました。議長には、家畜繁殖学研

究室の楠田淳(三年)が選出され、下記の議題が承認されました。

- 一、昭和六十三年度事業報告及び決算報告
- 二、昭和六十四年度行事計画案及び予算案
- 三、収穫祭における臨時徴収について

昭和63年度畜友会役員名

昭和六十三年度の畜友会臨時総会において信任された畜友会役員は、左記の通りで任期は平成元年度の臨時総会までとします。

委員長	塚本 涉	繁殖(四年)
副委員長	加藤 智	繁殖(四年)
	榊原 匡	生理(四年)
	畑 肇	衛生(三年)
会計	亀田 謙一	経営(四年)
	深津 弘行	繁殖(四年)
	李 忠憲	育種(三年)
会計補佐	吉田 春昭	(一年)

渉外	青塚 直	育種(四年)
	町井 博	衛生(四年)
	神永 憲一	繁殖(三年)
	広田 武司	(一年)
企画	石和田研二	飼養(四年)
	泉 昌史	利用(四年)
	七條 弘史	利用(三年)
庶務	菊留 茂訓	繁殖(三年)
	木下 雅仁	飼養(三年)
	堀田亜里子	生理(三年)
書記	岡崎 賢成	育種(三年)
	豊田 誠	経営(三年)
	芳賀 佳彦	利用(三年)

なお四年次生に関しては、任期を卒業式までとして、それ以降の業務に関しては新役員が決定するまで、副委員長が委員長の代行をすることとして、平成元年度役員は臨時総会により信任後、公示により報告いたします。

昭和六十三年度 畜友会役員



## 昭和63年度畜友会事業報告

- 12月21日 昭和63年度畜友会定期総会（於 図書館1F視聴覚ホール）
- 3月20日 卒業式、卒業生記念品贈呈（於 217教室）
- 4月6日 入学式
- 4月13日 新入生学外オリエンテーションに参加（13, 14）
- 4月28日 新入生歓迎会（於 生協食堂グリーン）
- 6月1日 第18回学内スポーツ大会に参加（22日まで）
- 6月26日 球技大会（ソフトボール）雨天中止
- 7月7日 昭和63年度畜友会臨時総会（於 特2教室）
- 9月20日 収穫祭についての説明会（於 厚木中央農場）
- 10月5日 第96回収穫祭畜産学科統一本部発足
- 10月31日 第96回収穫祭に参加（11月4日まで）
- 11月16日 第96回収穫祭慰労会（於生協食堂グリーン）

## 昭和63年度畜友会決算報告

（昭和63年11月30日現在）

### 収入の部

	予 算	決 算	差引残高
前年度繰越金	413,456	413,456	0
会費収入	0	0	0
新入生	992,000	882,000	△110,000
編入生・転科生	36,000	20,000	△16,000
未納会員	258,000	74,000	△184,000
利息	0	1,250	1,250
奨助金	0	70,000	70,000
計	1,699,456	1,460,706	△238,750

### 支出の部

	予 算	決 算	差引残高
卒業生送別会費	100,000	170,000	△70,000
卒業生記念品費	200,000	200,000	0
新入生歓迎会費	89,746	89,746	0
「ふじみの」第27号印刷費	390,000	390,000	0
球技大会費	60,000	0	60,000
学内スポーツ大会援助費	100,000	91,010	8,990
夏期実習農場紹介費	10,000	0	10,000
収穫祭援助費	500,000	249,081	250,919
総務費	130,000	50,820	79,180
予備費	119,710	0	119,710
計	1,699,456	1,240,657	458,799

\* 卒業生送別会費の不足額は援助費より補充

収入総額	支出総額	次年度繰越金
1,460,706	1,240,675	220,049

上記相違ないことを認めます。

昭和63年度畜友会会計 李 忠 憲

昭和63年度畜友会会計監査 4年 石川 聖浩 3年 堤 信一  
2年 金井 勉 1年 橋本 匡司

## 昭和64年度畜友会行事計画(案)

- 12月上旬 昭和64年度畜友会定期総会
- 1月中旬 卒業生送別会
- 3月下旬 卒業式, 卒業生記念品贈呈
- 4月上旬 入学式
- 中旬 新入生学外オリエンテーション参加
- 下旬 新入生歓迎会
- 6月上旬 夏期農業実習紹介開始
- 第19回学内スポーツ大会参加
- 第97回収穫祭 畜産学科準備委員会発足
- 下旬 昭和64年度畜友会総会
- 7月上旬 学内スポーツ大会慰労会
- 9月下旬 収穫祭についての説明会(於 厚木中央農場)
- 10月上旬 第97回収穫祭畜産学科統一本部発足
- 下旬 第97回収穫祭参加
- 11月中旬 第97回収穫祭慰労会

その他(球技大会等)

上記が畜友会の今年の活動です。会員の方々の積極的な参加をおまちしています。

## 第十八回学内スポーツ大会結果報告

### △団体の部▽

バレーボール

バスケットボール

ソフトボール

ハンドボール

ミニサッカー

ゲートボール

相撲

剣道

卓球

バドミントン

軟式テニス

相撲

剣道

卓球

バドミントン

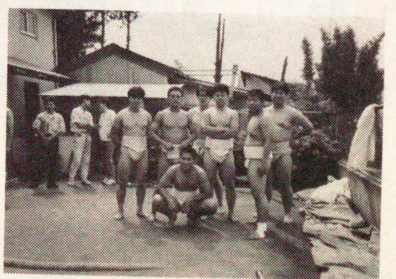
軟式テニス

相撲

剣道

卓球

団体部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部	個人部
男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子	男子
女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子	女子
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位
優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位	優位



東京農業大学畜産学科  
"畜友会"規約

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す
- 第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
    - 一、正会員
    - 二、特別会員
    - 三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在学学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六条 一、本会は役員二十名、クラス委員八名、監査四名をおく。
  - 二、役員は委員長一名、副委員長三名、書記二名、会計二名、会計補佐二名、渉外四名、企画四名、庶務三名とする。
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 一、第六条第一項の役員のうち十四名は畜産学科各研究室の三及び四年次生よりそれぞれ二名ないし二名ずつ選出する。
  - 但し、研究室の学生責任者を原則として含むものとする。
  - 他の役員については、委員長が推薦する。
- 二、クラス委員は一及び二年次生からそれぞれ四名ずつ、計八名選出する。
  - 三(1) 役員の学年のうち、委員長にあたっては四年次生とし、副委員長三名のうち四年次生二名、三年次生一名、会計三名のうち四年次生二名、三年次生一名とする。
  - (2) 委員長不在の場合は、副委員長が代行するものとする。
- 四、第六条第一項の監査員四名は各学年一名ずつ選出する。
- 五、第六条第一項のクラス委員は原則とし

2年生  
新3年生

- て五月までに選出し、うち女子一名を含むものとする。
- 六、役員及び監査は定期総会において信任を得るものとする。
- 七、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならぬ。
- 九、役員は原則として一年とする。
- 十、総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 十一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。
  - 一、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
  - 二、委任状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
  - 三、委任状の検査は役員が行なう。
  - 四、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもちいて追加し即日効力を発する。

第十二条

- 定期総会は年一回十二月に招集する。
- 臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。
- 一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
- 二、役員名の三分の二以上が必要と認めたと

- 第十三条 総会の開催は五日前に公示しなければならぬ。
- 第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。
- 第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 第十六条 総会出席者の過半数により役員の不信任を可決できる。

第四章 業務

- 第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。
- 第十八条 本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。
- 第十九条 本会は左記の業務を行なう。
  - 一、会員親睦会
  - 二、講習会及び研究発表会
  - 三、見学調査
  - 四、機関紙の発行
  - 五、その他第二条に附帯する業務

201  
151  
50

第五章 会費

- 第二十条 会費は年間二〇〇〇円とする。その納金は四年分一括し、入学時に納入のこと。

683



第二十一条

本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。納入金の払い戻しは行なわない。但し入学取消しの場合はその限りではない。

第二十三条 決算報告は十一月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

第六章 監査

第二十四条 本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章 附則

第二十七条 本規定解釈の講義は、**役員会**において、最終的解釈する。

第二十八条 本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

編集後記

毎年のように少人数の編集員でつくりあげたふじみのも今回で28号を発刊できました。このふじみのも28年目にして昭和から平成へと時代が変わったの初めての発刊となりました。これを一つのくぎりとして今後もより一層充実したものをつくっていききたいと思います。またこれからのふじみのの発刊を後輩達に期待をして編集後記といたします。

最後になりましたが、忙しい中原稿を書いていただいた先生方、会員の方々に厚く御礼申し上げます。

編集員一同

編集部では「ふじみの」第二十九号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いいたします。

記

募集期間 平成元年六月～平成二年一月下旬

要項 論文、随筆、紀行文、主張  
四〇〇字詰、十枚以内

写真カット、は随意  
表紙図案、三色以内

宛名 東京都世田谷区桜丘1-1-1  
東京農業大学畜産学科内  
畜友会

ふじみの編集委員会

発行日 平成二年四月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会「ふじみの」

編集委員会  
TEL (四二〇) 一一二二一(呼)

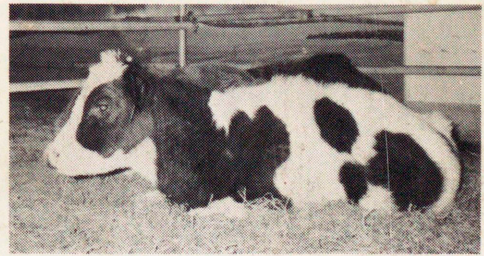
平成元年3月1日 発行

“ふじみの” 第28号

編集責任者 渡邊誠喜  
編集長 神永憲一  
発行者 畜友会

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1  
東京農業大学畜友会  
電話 (420) 2131(呼)

印刷所 東京都世田谷区経堂1-6-13  
エルデ・タイプ社  
電話 (429) 1067



1989